

東北學院大學論集

CII

English Language
&
Literature

March 2018

東北学院大学学術研究会

Essays and Studies
in
English Language & Literature

No. 102

March 2018

東北学院大学学術研究会

表紙の題字は

元本学教授・文学部長 小林 淳男 先生

目 次

論文

1. Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)
..... 箭川 修 (1)
2. Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み
..... 吉村富美子 (33)

平成 29 (2017) 年度文学部英文学科公開講義 「主人公で読む英米文学」 Proceedings

1. 主人公で読む G. チョーサー 『トロイルスとクリセイデ』
..... 柴田 良孝 (49)
2. 主人公は誰だ? : 『オセロ』 を読む
..... 福士 航 (67)
3. エリザベス・ベネットの新しさ —— 『高慢と偏見』 から
読み取るイギリス社会の変化
..... 向井 秀忠 (79)
4. ソール・ベロー 『雨の王ヘンダソン』 の主人公は何を考
えているのか —— 小説の創造的解釈をめざして
..... 植松 靖夫 (93)
5. E. スコット・フィッツジェラルド 『グレート・ギャツビー』
におけるケアと主人公 —— 傷からのつながり
..... 井出 達郎 (113)

執筆者紹介（執筆順）

箭川	修	本学文学部教授
吉村	富美子	本学文学部教授
柴田	良孝	本学文学部教授
福士	航	本学文学部准教授
向井	秀忠	フェリス女学院大学文学部教授
植松	靖夫	本学文学部教授
井出	達郎	本学文学部准教授

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

箭 川 修

序：ソネット理解のための基礎知識：脚韻構成と論理構成との相関

奇妙なソネット集が存在する。献呈ソネットを含めてわずか 10 篇からなるこのソネット集は、じっくり検討してみると、その要素のすべてが奇異と言えるほどの特異さに満ちているのだが、最初に目を引いたのは、冒頭に付された献呈ソネットに見られる、脚韻構成と論理構成との間に存在する違和感であった。こうした違和感を理解するためには、英詩批評の基本に立ち返り、ソネットに関して集積されてきた常識と言えるものを確認しておく必要があるだろう。

ソネットを分類する際の基本的なカテゴリーとして、イタリア風ソネット (Italian sonnet) / イギリス風ソネット (English sonnet), あるいは、ペトラルカ風ソネット (Petrarchan sonnet) / シェイクスピア風ソネット (Shakespearean sonnet) という区分が考えられる。一見したところ、「イタリア風」は「ペトラルカ風」と、「イギリス風」は「シェイクスピア風」とほぼ同義と捉えられているふしもある。しかしながら、根拠薄弱な個人的な感覚かもしれないが、ペトラルカ風ソネットをイタリア風ソネットと呼ぶことにそれほどの躊躇いはないが、イタリア風ソネットをペトラルカ風と呼ぶことにはかなりの違和感がある。同じように、シェイクスピア風ソネットをイギリス風ソネットと呼ぶことにそれほどの問題は感じないが、イギリス風ソネットをシェイクスピア風ソネットと呼ぶことには躊躇

いを感じる。なぜか、それぞれに互換性を持つかに見える用語は完全に等価とは思えないからだ。韻律構成という視点からすれば、「イタリア風」と「ペトラルカ風」は、また、「イギリス風」と「シェイクスピア風」はほぼ等価であると言っていいだろう。ならば、問題はそれ以外のところに、恐らくその一つは（文学批評の常識の一部として）韻律構成と対応すると考えられてきた論理構成と関係がある。

韻律構成から見て、シェイクスピア以前にも「イギリス風」と呼べるソネットは数多く存在していた。また、シェイクスピアのソネット集の出版が1616年であり、批評の領域で「シェイクスピア風ソネット」という用語および概念が確立していくのはさらに後のことになるため、シェイクスピア以前にイングランドで創作されたソネット作品にシェイクスピア風ソネットに見られる特徴が顕著に現れることは期待できない。〈シェイクスピア風ソネット〉は特殊な理念的存在と捉える必要がある。似たような事情は「イタリア風」と「ペトラルカ風」にも当てはまる。ただし、こちらで中心的な問題となるのは、論理構成以上に〈ペトラルカ風 Petrarchism〉と言われる思考様式および言語表現・表現技法であろう。

シェイクスピア風ソネットの脚韻構成は厳密である。abab cdcd efef gg と連ねられる詩行は、基本的に4+4+4+2と分割される。つまり、全体は4行連 quatrain が3つと2行対句 couplet 1つから構成されている。また、シェイクスピア風ソネットは脚韻構成に論理構成を巧妙に重ね合わせる、Quatrain 間の脚韻の差異がそれぞれの quatrain 内部の言説の差異を視覚化ないし聴覚化するとともに、交差韻 cross rhyme が——時に〈起承転結〉とも言われるような——論理の進行性・展開性を裏書きする。イギリス風ソネットの脚韻構成はシェイクスピア風ソネットほど厳格ではないし、厳密な〈起承転結〉の論理構成が常に備わっているわけでもない。

イタリア風ソネットにも韻律構成に相関する論理構成がある。イタリア風ソネットは前半 8 行の octave と後半 6 行の sestet から構成され、octave と sestet の間には volta (turn) と呼ばれる転回点が置かれる。Octave の脚韻構成は abba abba が主流であるが、この構成は、脚韻を 2 種類に限定することによって、octave 内部での言説のまとまりを保証するとともに、畳み韻 enfolding rhyme によって論理の進行性を食い止めている¹。Sestet の始まりとともに、脚韻には新しい音が導入される。Sestet の脚韻構成は cdcdcd cdecde などを中心にしながら多様なヴァリエーションを展開する。とは言え、伝統的な構成では、cdcdee や cddcee, ccddee というような、couplet に近づきそうな脚韻は忌避されていたようだ。

イタリア風／イギリス風。ペトラルカ風／シェイクスピア風以外にも、脚韻構成と論理構成との組み合わせを根拠とするソネットのカテゴリーはいくつか存在する²。その中で注目しておきたいのは、スペンサー風ソネット (Spenserian sonnet) である。『妖精の女王』*The Faerie Queene* (1596) のスタンザ構成 (ababbcbcc) から導出されたと説明される場合もあるが、abab bcbc cdcd ee という脚韻は quatrain 内部での論理の独立性を否定し、論理を鎖状に編成・展開しつつ、有機的全体として言説をまとめ上げる。ただし、8 行目と 9 行目の間に volta が存在している場合も多いとされる。

以上のように、韻律構成という〈形式〉と論理構成という〈内容〉に相

-
- 1 ソネット形式がイタリアからイギリスに輸入され定着していく過程で、なぜ脚韻構成に変更が必要であったかに関する常識的な説明は、イタリア語と英語の文法構造の違い——イタリア語の方が格変化などによって同音の脚韻語を見出すことが容易であるのに対し、英語は語幹が剥き出しになることが多く、同音の脚韻語を探し出すことは困難であったため——と言われている。しかし、イタリア風で主流であった enfolding rhyme がイギリス風では cross rhyme に取って代わられたことを説明する記述には出会ったことがない。
 - 2 Nelson Miller. "Basic Sonnet Forms" (<http://www.sonnets.org/basicforms.htm>) の記述が簡便である。

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

関を認めるところから英詩理解の基礎が存在する。もちろん、韻律構成にせよ、論理構成にせよ、両者の緊密な関係にせよ、すべては理念という抽象に過ぎず、現実が作品ごとに異なることは間違いない。

1. 奇妙なソネットの韻律構成と論理構成

冒頭に「奇妙なソネット集」と紹介したのは Sir John Davies (1569-1626) の *Gulling Sonnet* (1594) である。献呈ソネットの韻律と論理構成を確認してみよう。

Gulling 1.

Here my Cameleon Muse her selfe doth change
To divers shapes of gross absurdities,
And like an Antick mocks with fashion straunge
The fond admirers of lewde gulleries.
Your judgment sees with pitty and with scorn
The bastard Sonnets of these Rymers bace,
Which in this whiskinge age are daily borne
To their owne shames. and Poetries disgrace.
Yet some praise those, and some perhappse will praise
Even these of myne : and therefore thes I send
To you that pass in Courte your glorious dayes,
That if some rich, rash gull these Rimes commend,
Thus you may sett his formall witt to schoole,
Use your owne grace, and begg him for a foole.

J. D.

脚韻構成は ababcdcdefefgg であり、形式上は間違いなくイギリス風と言える。イギリス風であれば、abab cdcd efef gg という（厳格さの程度につい

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

ては捨象するにして) 論理構成が存在することが予想される。しかしながら、実際の論理構成は abab cdcd efef gg を要請し、シェイクスピア風であれば作品を締め括るはずの couplet が独立できず、‘[so] that ... may’ 構文の内部に、if 節の帰結として配置されている。この部分の詳細については後に検討する。

以下にソネット集本体と言える全 9 篇の脚韻構成を掲載する。比較的明確に思える論理の切れ目には斜線を入れた。

Dedication	abab/ cdcd/ efef/ gg
Sonnet 1	abab/ abab/ cdcd/ ee
Sonnet 2	aba/b abab/ cdcd/ ee
Sonnet 3	abab/ abab/ cdcd ee
Sonnet 4	abab/ cdcd/ efef/ gg
Sonnet 5	abab/ cdcd/ efef/ gg
Sonnet 6	abab/ abab/ cdcd/ ee
Sonnet 7	abba/ abba/ cdcd/ aa
Sonnet 8	abba/ acca/ dede/ ff
Sonnet 9	abab/ abab/ cdcd/ ee

全体として考えると、それ程の統一感はない。Cross rhyme が主流を占めているが、第 2 quatrain は第 1 quatrain の abab を繰り返すものと、cdcd に移行するものがある。特徴的なのは、表面上は明確にイギリス風ソネットの脚韻に見える献呈ソネットとソネット 4 番および 5 番だろう。しかしそこにシェイクスピア風の論理構成が存在しているという保証はない。

詩行を enfolding rhyme で始めると、俄然イタリア風への期待が高まる。

Sonnet 7 は最終 2 行が cd であれば純粹イタリア風になりえた作品かもしれないが、実際には 1 行目と最終行を同一にするというこの詩特有の目的によって aa が生じている。それでも後半 6 行を cacaca という具合にまとめる手はあったかもしれない。

ソネットの脚韻構成について想起すべきは Sir Philip Sidney の *Astrophil and Stella* (1591) と Edmund Spenser の *Amoretti* (1594) であろう。108 篇からなる『アストロフェルとステラ』はイタリア風を基調としながらも——作品集の随所で言及されているように——イタリア風の反復であることを忌避するかのようになり、また、ソネット創作の即興性を誇示するかのようになり、様々な脚韻を案出・提示してみせる。他方、スペンサーの脚韻は、先に紹介したように、堅牢な構築性を誇り、その場で請われて創作したなどという気配は微塵もない。連作ソネットとしての性質も同様かもしれない。以前にシドニーのソネット集について論じた時に提示したのは、折々に創作され、紙葉（手稿 Manuscript）に書き込まれたソネットを並べ替え、納得できる配列を検討する——後付けで連作に筋を捻出しようとする——詩人の姿である³。実際、『アストロフェルとステラ』を物語として追いかけて行こうとすると、筋の断裂や跳躍が多い（この特徴それ自体が詩人の恋物語の現実を反映していると言えないこともない）。スペンサーの『アモレッティ』から想起される映像は全く異なる。*Epithalamion*（祝婚歌）と抱き合わせにすることで、スペンサーは『アモレッティ』に——結婚という——物語の終着点を確保している。物語の筋は緊密で、数秘学的な要素さえ縦横かつ緊密に組み込まれている可能性も指摘されてい

3 箭川修 「〈文化の美学〉と『アストロフェルとステラ』」、箭川修、佐々木和貴、川田潤著、『新歴史主義からの逃走』（東京：松柏社、2001年）、207-208。

る⁴。

2. 初期近代と近代：Public の意味

さて、本論が考察の対象とする〈ソネット集〉が流行した時代はルネサンスないし初期近代に当たる「ルネサンス」は暗黒の中世からの脱却という意味合いが強いが、文芸復興という社会の志向性を語りもする⁵。他方、「初期近代」という名称は、現代という位置から視線を遡らせ、近代に至る途上に存在した——時に中世から脱却し切れない——時期として、近代に至ってようやく完成される性質を未完の萌芽の状態として提示するような時代を表現するのかもしれない。いずれにしても厳密な定義は困難であるが、初期近代と近代を識別するための有力な手掛かりの一つとして、“make public”あるいは“publish”という表現の内包や用法に関する差異が存在すると言えるかもしれない。日本語にすれば、「公にする」ということだが、〈公〉の中に何が含まれているかが問題である。近代における“make public”や“publish”の意味範囲は、現代から見て常識的な「出版印刷」——“publication”や“publishing”——に関わるものであり、この領域

4 Carol V. Kaske, “Spenser’s *Amoretti and Epithalamion* of 1595: Structure, Genre, and Numelology,” *English Literary Renaissance*. Vol. 8. No. 3 (Autumn 1978), 271-295; Alexander Dunlop, “Number symbolism, modern studies” in Maren-Sofie Røstvig, “Number symbolism. tradition of”, Albert Charles Hamilton (ed.), *Spenser Encyclopedia* (Toronto: University of Toronto Press, 1990), 512-515. 数秘学的要素はシドニー作品にも見出されるが、その扱いはスペンサーに比べるとかなりシンプルなものに思える。

5 ただし、イタリアにおけるルネサンスとイギリスにおけるルネサンスはその意味合いが大きく異なるはず、というのが筆者の持論である。端的に言えば、イタリアのルネサンスは基本的に過去の自文化の復活を目指すものであるが、イギリスのルネサンスはイタリアのルネサンスを（フランス、オランダ等を経由して）移植しようとするものであり、その意味において多層的な異文化の導入であると一言わざるを得ない。実際、ソネットのイギリスへの導入はこうした文化現象の典型と述べることができるかもしれない。

で前提とされている〈公〉は活字文化構成員全体——文字を読めない個人や社会層もいるが、理想的には、社会の全構成員——を指す。一方、初期近代のイングランドには、古代・中世から引き継がれた手稿文化と150年ほど前のドイツでのグーテンベルクによる発明に端を発する活字文化が併存していた時期がある⁶。初期近代の結構な部分が、〈公〉を手稿文化の構成員と考えていただろうことは驚くに値しない。このような場合、手稿文化における“make public”あるいは“publish”はどのような状況を表現するのだろうか。「披露する、見せる」ということでしかないかもしれないが⁷、「特定の状況で」とか「特定の相手や人々に対して」といった限定を必要とするようにも思われる。手稿文化における〈公〉はかなり窮屈そうに思える。

初期近代の手稿文化は、この時代の作品の研究者に多くの留意点を突き付けてくる。最大の問題は、作者と作品の帰属の問題である。現在ではかなり整った作品集が出版されている詩人の作品群であっても、原稿・資料の集積や編集の時点では、手稿に依存する必要があった。手稿にも——日記や備忘録に似たものから、現代で言う〈プロ〉の写字生の筆になる贈答用の彩色写本まで——様々な形態が存在する⁸。そうした中で、詩の帰属の確定に関わるような状況を念頭に考えてみると、手稿原稿は(本

6 近代の進行につれて手稿文化は活字文化に駆逐されていくが、カリスマ性を持つテキストなど、それなりの存在意義もあって、現代に至るまで、完全に消滅してしまったわけではない。

7 Patricia Fumerton, *Cultural Aesthetics: Renaissance Literature and the Practice of Social Ornament* (Chicago: U of Chicago P, 1991) pp. 63-110 [生田省悟, 箭川修, 井上彰訳, 『文化の美学——ルネサンス文学と社会的装飾の実践』。東京: 松柏社, 1996年, pp. 103-170] を参照のこと。

8 箭川修, 「〈文化の美学〉と『アストロフェルとステラ』」 pp. 185-204 [四二つの文化——手稿と活字]。『新歴史主義からの逃走』東京: 松柏社, 2001 を参照のこと。

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

人が書いたか、本人の監修・監督のもとで書かれた) オリジナルと言えるものとその二次的・三次的な写しということになるだろう。いずれにしても(日記や備忘録のように、書きつけた日時が書き込んであるものでなければ)手稿の作成年は確認困難である。ちなみに、手稿は下流に向かうほど(二次。三次と進んでいくと)オリジナルとの差異が大きくなる。どこかの手稿に残った詩のテキストがこれまでに存在していたテキストと比較検討され、源流への近さが判定される。その際、詩のテキストに創作した詩人の名前が明記されていることはそれほど期待できない。テキストによって作者が特定できる可能性が高くなるのは活字印刷が作者の許諾の元に行われるという形態が成立するのを待つ必要がある。手稿のどこかに記載されている(かもしれない)年号などを手掛かりに作品の創作年代を推定し、手稿の筆跡を調べることで信頼のできる手稿なのかを判定し、他の詩人からの流用でないのかなどを確認しながら、慎重に出版用の原稿が構築されていく。

3. Sir John Davies という詩人

本稿が対象としている詩人が Sir John Davies であることは第 1 節で明らかにしたが、前節に見たような文化状況のもと、相手にしようとしている初期近代イギリスには少々ややこしい詩人群がいる。John Davies of Hereford (c. 1565-1618), Sir John Davies (1569-1626), John Donne (1573-1626) である。この 3 人の詩人は、生年にして 8 年以内、没年にして 13 年以内に活動していた⁹。John Davies of Hereford と Sir John Davies が紛らわしい

9 3 人の詩人の略歴を、生没年の部分を簡略化しつつ、英語版 Wikipedia から転載する。

John Davies of Hereford (c. 1565–July 1618) was a writing-master and an Anglo-Welsh poet. He referred to himself as John Davies of Hereford (after the city

ことは一目瞭然 (?) だろうが、なぜここに名前がまったく異なる John Donne が加わってくるのか、こうした疑問が浮上するのは、現代の私たちが、多大な労力をかけた作品編集・編纂の果てに位置していることを忘却しているためだ。手稿に掲載された詩作品の作者名がまったく書かれていないものも多い（現代に至るまで確認不可能な場合には“Anonymous”ということになる）が、イニシャルによる表記だけということも往々にしてある。John Donne が二人の John Davies と混同される可能性が出てくるのはここにおいてである。3人の詩人はすべて“J. D.”——当時のスペリングの慣習に従うならば、“I. D.”——と表記されてしまう。見分けるための手掛かりはいくつかあり得る。手稿が保存されていた場所（貴族の屋敷等）は詩人の直接的・間接的交友関係と関わっている可能性が高く、人間関係や当時の出来事——「この詩人は****年のクリスマスにこの貴族に招待されていた」——などを仔細に検討・検証していけば、何らかの筋が見えてくる可能性がある。とは言え、どんな詩人であれ、例えばソネッ

where he was born) in order to distinguish him from others of the same name, particularly the contemporary poet, Sir John Davies (1569-1626).

Sir John Davies (1569 (baptized)-1626) was an English poet, lawyer, and politician who sat in the House of Commons at various times between 1597 and 1621. He became Attorney General for Ireland and formulated many of the legal principles that underpinned the British Empire.

John Donne (1573-1631) was an English poet and cleric in the Church of England. He is considered the pre-eminent representative of the metaphysical poets. His works are noted for their strong, sensual style and include sonnets, love poems, religious poems, Latin translations, epigrams, elegies, songs, satires and sermons. His poetry is noted for its vibrancy of language and inventiveness of metaphor, especially compared to that of his contemporaries. Donne's style is characterized by abrupt openings and various paradoxes, ironies and dislocations. These features, along with his frequent dramatic or everyday speech rhythms, his tense syntax and his tough eloquence, were both a reaction against the smoothness of conventional Elizabethan poetry and an adaptation into English of European baroque and mannerist techniques.

ト集を構成する作品のすべてがどこかの貴族の手稿の中に揃って保存されている、というような状況は想像しがたい。詩のテキストは分散して、場合によっては異なる詩人たちの作品を混在させた個人的な選集の中に存在しているかもしれない。その際に作品の著者名がイニシャルだけに過ぎなくとも手稿の片隅に書き込まれているようなことがあれば望外の事態であろう——下手をすると、イニシャルは手稿を作成した本人の簡易的な署名という場合さえあるかもしれない。

ディヴィーズ卿の詩が「編纂」されるようになったのは 19 世紀のことで。創作の起源へと遡る過程で幾つもの手稿を確認するための労力を想像すると気が遠くなる¹⁰。

ここでディヴィーズ卿の生涯を簡単に紹介しておく。

1588 年以降ロンドンの法学院のひとつ Middle Temple に所属。

1590 年頃に *Epigrammes* を執筆。

1594 年の早い時期に *Orchestra* を執筆。出版は 1596 年。ダンスを主題としたこの詩を当時の人々は“frivolous”（軽薄）と評した。

1595 年に弁護士資格を取り、法律家として活動を開始。

1598 年に弁護士資格停止、理由は *Orchestra* の献呈先でもあった同じ法律家 Richard Martin —— 後にロンドン市法律顧問 Recorder of London になる —— を食事中に襲撃し、棍棒で頭を殴打したため。

1594 年に *Gulling Sonnets* を出版。

1599 年に *Nosce Teipsum*（汝。自身を知れ！）を出版。

10 Alexander B. Grosart (ed.), *The Complete Poems of Sir John Davies*. in 2 vols (London : Chatto and Windus, 1876).

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

*Elizabeth 女王はディヴィーズの詩を高く評価——どこから評判を得たのかは不明！

1599 年に acrostic を用いた *Hymns of Astraea* を出版し、エリザベスに追従。

1601 年に弁護士資格を回復——王爾尚書 Egerton 公の助力を得、マーティンに直接謝罪を行った後。

1601 年に下院議員となる。

1603 年にエリザベス女王の没後、(James I として即位すべくイングランドに向かっていた) スコットランド王 James VI を国境まで出迎えに行く。

*この際に、ジェイムズはディヴィーズに「*Nosce Teipsum* の作者なのか」と尋ねたと言われる。このエピソードは、詩が——イングランドとスコットランドの国境をさえ越えて——社会的な機能を果たしていたことを示している。ジェイムズがディヴィーズを重用することになった動機のひとつに詩人としての才能が関係していることは明らかだろう¹¹。

4. ソネット集 *Gulling Sonnets* (1594)

(A) *Gulling Sonnets* は何をしている？

『ガリング・ソネット』を“mocking Petrarchan conventions in Elizabethan sonnets”と評する批評家もいるが、中途半端なまとめを行うよりは、『ガリング』が語っていることや行っていることを確認するのが望ましいと思

11 ディヴィーズと同じような状況にあり、同じような期待を抱きながらもジェイムズに気に入られなかった詩人もいる。Sir Walter Raleigh (1554-1618) である。ローリーは詩人というよりもより実質的な(損得上の)期待をジェイムズに持たせてしまったのかもしれない。

われる。まずは、デヴィーズ卿が自らのソネット集を修飾するために付した“Gulling”がどのような意味なのかを OED で確認してみる。“gull. v.³”には、1. *trans.* To make a gull of, to dupe, cheat, befool, ‘take in’, deceive. Also *absol.*, to practice cheating. †2. To deprive of by trickery or deception; to cheat out of. *Obs.* とあり、“gulling. *phl. a.*²”には、“That gulls or deceives; cheating, deceptive”とあった後に、“?1519 Davies (*title*) Gullinge Sonnets. in *Poems* (Grosart, I. 51) と出典が添えられている。

『ガリング』の献呈ソネットの宛先、すなわち、ソネット集の献呈相手も確認しておこう。Sir Anthony Cooke (1555-1604) は、Edward VI の個人教師をも務めた同名の著名な人文主義者を祖父¹²に持ち、Robert Cecil¹³ および Francis Bacon¹⁴ の従弟に当たる。スペインの Cadiz で Earl of Essex, Robert Devereux (1566-1601) の元で戦い、1596 年にナイト爵に叙されており、1594 年には Michael Drayton が *Ideas Mirror* を献呈している。

この人物を念頭に、献呈ソネットは何を語るのか。内容理解の補助的手段として散文パラフレーズを提示する。

1. Here my Chameleon Muse changes herself to diverse shapes of gross absurdities, and (like a motley-dressed jester or fool) mocks the fond admirers of lewd gulleries with strange fashion.
2. Your judgment sees the bastard sonnets of the base Rhyimers with pity and with scorn; which [the bastard sonnets] are (in this speedy/rash age) daily born and shame themselves and disgrace poetry.
3. Yet. some will praise those bastard sonnets, and some perhaps will praise

12 Sir Anthony Cooke (1504-1576).

13 Robert Cecil. 1st Earl of Salisbury (1563?-1612). エリザベス 1 世の寵臣であった Burghley 卿 William Cecil (1520-1598) と 2 番目の妻 Mildred Cooke (1526-89) との間の子。

14 Francis Bacon (1561-1626). イギリス経験主義哲学の祖と称される。母 Anne (Cooke) Bacon (c. 1528-1610) の姉 Mildred が William Cecil に嫁いだ。

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

even these sonnets of mine : therefore I dedicate these sonnets to you
who spend your glorious days in court ;

4. So that you may thus set to school this formal wit, use your own grace, and
call him a fool, if some rich and rash gull commend these rhymes.

詩人の立場で語られるのは —— 理解のために若干の脚色を加えたが —— おおよそ以下のような話である。1. 変幻自在の私の詩神は、野卑で馬鹿げたものに姿を変え、低劣なごまかし作品を愚かにも賞賛している輩たちをからかう。2. 献呈相手のクック卿の眼力は、群小詩人たちが創作するソネットが *bastard* (庶子>粗悪品) であることを明らかにするが、そうした粗悪品は日々生産されており、自ら恥をさらすのみならず、〈詩〉それ自体を汚してしまう。3. しかも、粗悪品を称賛する人々が出てこないとも限らない。下手をすると、粗悪品を揶揄するためにふざけて書いた私のソネットを真に受けて「すごい」と褒める人さえ現れるかもしれない。だから、宮廷で活躍されているクック卿にこのソネット集を献呈させて頂くのです。4. もしどこかの羽振りがいいだけの粗忽者が私の作品を「なかなかいいよ」などと口にすることがあれば、あなた様から真実を明らかにして頂いて、そいつを馬鹿者と呼んでくださるようになります。

論点を整理しよう。ソネットには —— 優れたソネットと粗悪なソネットの —— 2種類がある。粗悪なソネットを創作するヘボ詩人も多いが、粗悪なソネットを粗悪と判断する鑑識眼・識別力を持たない人々も多い。そうした状況を憂う詩人は、パロディ的手法で粗悪さを模倣する皮肉なソネットを創作してみた。しかし、その粗悪さも、鑑識眼・識別力を持たない人々によって賞賛されるというさらに皮肉な結果に至る可能性がある。だから、これらの作品の成立事情をこの献呈ソネットに記しておきますので、クック卿あとはどうぞ宜しく、といった具合だろう。

粗悪品が日々生産されているという状況が存在したことを裏書きするように、この時代には——恐らく Sir Philip Sidney, *Astrophel and Stella* (published, 1591; composed, 1580s) を契機として——連作ソネットの一時的な大流行“Sonnet craze”が発生したとされる。同時代に出現したソネット作品としては、連作ソネットに限定するとしても、Edmund Spenser, *Amoretti* (published 1595; composed 1594); Samuel Daniel (1562-1619), *Delia* (1592); Michael Drayton (1563-1631), *Idea* (1594; revised 1619); Barnabe Barnes (c. 1569-1609), *Parthenophil and Parthenophe* (1593); Fulke Greville, Lord Brooke (c. 1554-1628), *Caelica* (published posthumously, 1633) などが挙げられる¹⁵。

問題は、パロディ的手法で模倣されている粗悪なソネットとはどのようなものかということになるだろう。*Gulling Sonnets* のパロディの矛先として広く認定されているのは作者不詳の *Zepheria* (1594) である。実際、*Gulling Sonnets* の第7番から第9番には *Zepheria* に対する言及が夥しい。しかしながら、*Gulling Sonnets* が9篇で、*Zepheria* が40篇であるという不均衡、さらには前者が純粋なソネット集であるのに対して、後者が“Canzon”¹⁶ という名称の下に様々な長さの詩を収めているという状況もあり、*Gulling Sonnets* が *Zepheria* のどの箇所を揶揄しているのかを具体的に列挙や証明を行うことは極めて困難に思える。“Mocking Petrarchan conventions in Elizabethan sonnets”で言及されている「ペトラルカ的慣習」は比喩や修辭的技法の部分に限定されるものなのだろうか。

15 エリザベス朝のソネットに当たるには、Sonnet Central というサイト内のページ (<http://www.sonnets.org/eliz.htm>) が便利。

16 イギリス風の“Song”や“Sonnet”ではなく、ペトラルカが自作に用いた“Canzoniere”を想起させる名称を利用していること自体がペトラルカへの傾斜を示していると言えるだろう。

(B) *Gulling Sonnets* の目的は何？

連作ソネットとは言い難い *Zepheria* を揶揄するために—— 献呈詩を含めて 10 篇という短かさとはいえ—— 連作ソネットという形式をパロディ的に用いて行おうとしたのはなぜだろう。シドニー卿の *Defense of Poesy* (published 1595; composed c. 1579) の創作の引鉄になったと言われる Stephen Gosson (1554-1624) の詩歌不要論のように、純然たる否定・拒絶としてソネットという形式に批判を加えることも可能だったはずだ。ちなみに、当時の社会には、宮廷人には学芸は不要であるとする論が頻出していたが、そもそも詩人であるデヴィーズ卿にそうした批判は困難であると推定したとして、ソネット以外の形式を用いて、「ソネットという慣習的形式には問題があるので、私は違うものを選ぶ」などと発言すれば問題はなさそうに思われる。

そもそも *Sonnet craze* はどこに発生したのだろうか。手稿の流通を通じて貴族社会に発生したのだろうか、活字印刷を通じてブルジョアから一般市民の間に発生したのだろうか。詩歌それ自体、また、詩歌を自在に操る能力を持つ詩人が貴族社会において重要な役割を担っていたことを重要に捉えるべきだろう。その典型的かつ象徴的な存在が「桂冠詩人 (Poet Laureate)」という制度である。例外が存在していることは当然だろうが、桂冠詩人は君主ないし国家が認定し、年金を支給する。詩人はそれと引き換えに冠婚葬祭や重要な国事に際して記念・祈念の詩を創作することが求められる。

君主・国家に桂冠詩人が対応するように、秀でた詩人は有力貴族の宮廷に依存する。有力貴族もより優れた、より評判の高い詩人を囲い込もうとする、社会的上昇を目論む詩人（ないし詩才ある若者）は手紙を送り、自らの詩を献呈することで貴族に認知してもらおうとする。こうした状況で

活動する詩人（ないし詩人の卵）に必要とされるのは即時性・即応性であろう。貴族の求めに応じて、澁みなく詩行を繰り出していく才能は何よりも高く評価される。臆面もなくおべっかを語り、絢爛至極の修辞を駆使することも必要だろう。

まさにこうした能力を培うために存在していたのが当時の Grammar school であるとも言えるかもしれない。Oxford や Cambridge などの有名大学、あるいはロンドンに4つ置かれていた法曹学院（Lincoln's Inn / Inner Temple / Middle Temple / Gray's Inn）への予備校といった社会的な位置付けかもしれないが、そこでのカリキュラムがまさにラテン語の読み書きを中心に据えていたことには言及しておく価値があるだろう。

法曹学院での業務がもっぱら法律や訴訟に関わるものであり、広い世界への拡散を目指すものではないということを考えても、必要とされていたメディアは出版ではない。また、出版しようとする決意と実際の出版の間に時間差が存在せざるを得ないという事実は、即時性・即応性を阻害する決定的な要因となる。さらに、詩人としての活動に話を限定するならば、無名詩人の詩集の予約出版に支出しようとする潜在的購買層が厚いはずはないし、自費出版では自らの懐を痛めることになる。貴族の宮廷近辺での手稿による流通を経て、なお魅力を失わない詩が集積され、その時点での潜在的後援者たる貴族に宛てた献辞を付して詩集として出版される、というのが出版に至る常道かもしれない。

だがそもそも、シドニー卿の『アストロフェルとステラ』やスペンサーの『アモレットィ』といったソネット集はディヴィーズ卿が批判すべきものになっている（墮している）だろうか。墮しているとすれば、恐らくディヴィーズ卿の批判は、ソネットにおけるペトルルカ的慣習のみならずソネット全般に及ぶことになるであろう。

5. 真剣な批判なのか？ 時流に乗ろうとしているだけか？

ディヴィーズ卿の詩のスタイルはどのように評価されてきただろうか。パロディという手法・方法論の検討も重要である。近代は「オリジナリティ (original/ originality)」を重視し、オリジナルでないものは、「創造性 (creativity)」の欠如を暗示する。これは出版という形態が確立し、著作権によって著作物が保護されていることが前提となる。つまり、著作物の周辺には土地を切り分ける柵のような境界線が引かれており、著者本人以外の誰かがこの内部から何かを「取ってくること」は、「盗ってくること」になり、「剽窃、盗作、盗用 plagiarism」として断罪されてしまう。しかし、こうした著作権の問題は、ルネサンス／初期近代においては極めて微妙である。第2節で見たように、ルネサンスでは“publish”の意味が曖昧であった。私たちは手稿の流通と印刷出版という2つの領域がまさに「文化」として併存していることを理解する必要がある。「文化として」という言い方をしたのは、手稿の流通は貴族の贈与の文化に組み込まれており、印刷出版は新興ブルジョア階級の骨格とも言える経済的取引として文化の一部をなすものだからである。この2つの文化は完全に分断されているわけではない。経済的取引によって入手した著作物（とりわけ、出版部数が少なく希少価値があるものや—— 予約出版が主流であった当時の出版慣習によって—— 入手困難な新刊本、人気本など）を贈答に用いることも十分に考えられるし、当時の著作物、とりわけ多くの詩集は、その冒頭部分に、贈与の文化に根差す「献辞」が付されている場合が多い。近代小説では、作者が家族の誰かの名前を作品の冒頭に掲げることはないわけではないが、ルネサンスのような「献辞」が付されることはない。仮にあるとすれば、それはかなり奇妙な外観を呈すであろう。

改めてディヴィーズ卿による、パロディによるソネット創作が提起している可能性を検討してみよう。1) ソネット形式全体を無用な社会的装飾として葬り去ろうとしているのか。2) 上質なソネットと下等(下劣?)なソネットの間に線引きを行い、前者を称揚し、後者を愚弄しようとするものなのか。3) (パロディであろうがなかろうが) 新たなソネット作品を社会的な流通の過程に投企することが詩全般・学芸全般という社会的資本を増大させる要素となり、そのサイクルの中に自らを投じることで、さらなる需要と供給を喚起しようとするものなのか。

ペトラルカ主義が問題の場合——なぜ問題にされなければならないのかという疑問は将来に向かっても答えられそうにないが——批判の仕方にもいくつかの方法が考えられる。1) 「怪しからん」と(表立って表現するかどうかは別にして) 批判し——例えば、純粋にイギリス風ソネットなどのような——代替的方策を提示する。2) 『ガリング』のようにパロディ化することによって対象の矮小化を目論む。3) 黙殺を決め込む、というのも批判のひとつであるかもしれないが、意見を持たない者や状況を理解していない者の沈黙との区別は困難である。

『ガリング』の献呈詩は。ディヴィーズ卿が嬉々として創作に取り組んでいる様子を伝えている。パロディは苦々しい思いで行なわれているわけではなさそうだ。ならば、こうした状況は次のように提示できるかもしれない。ソネット集『ゼフェリア』が世に出た時——あるいは「出ようとした時——ディヴィーズ卿は『ゼフェリア』が、自分が本領とする領域である法律用語を多用していること、『ゼフェリア』というペトラルカ主義を前面に出したパロディ兼オリジナルを超えるパロディを作成することで自分の詩的技量ないしオリジナリティを世間に広く——とりわけ自身の社会的活動に好影響をもたらすであろう貴族諸氏に——知らしめる機

会が訪れた、とほくそ笑んだのではないだろうか。

6. *Gulling Sonnets* は何をどのように語る？

批評的に辛いのは、パロディであることが事実であるとしても、『ガリング』の一篇一篇が必ずしも『ゼフェリア』中の特定の詩に言及しているようには見えないことである。『ガリング』はどのような特徴を有し、何をしようとしているのだろうか。散文へのパラフレーズを利用しながら、それぞれの詩を簡単に解釈してみたい。

Gulling 1.¹⁷

-
- 17 *Gulling Sonnets* からは、Robert Krueger 版から〔大意〕を利用して引用する。また、『ゼフェリア』のテキストは——『ガリング』の可能的なパロディ元を消去しないように——Margaret Christian, “*Zepheria* (1594); STC 26124): A Critical Edition.” *Studies in Philology*. vol. 100, No. 2 (Spring, 2003) pp. 177-243 に最小限の現代化を加えて提示する。*による注はクリスチャンから転載。

But if with error and unjust suspect
Thou shalt the burden of my grievance aggravate.
Laying unto my charge thy loves neglect.
A load which patience cannot tolerate :
First to be *Atlas* to mine own desire.
Then to depress me with unkind construction
While to mine own grieves may I scarce respire :
This is to heap *Ossa* on *Pelion**¹.
Oh would the reach yet of unequal censure
Might here but date his partiality :
Mistrust, who near is ripe till worst be thought on.
Hath my crime racked, yet to more high extensure*².
And now 'tis drawn to flat Apostasy :
So straight beset, best I lay hold on pardon.
Why then since better is it a penitentiary
To save than to expose to shame's confusion :
Thy face being veiled, this penance I award.
Clad in white sheet thou stand in Paul's Churchyard.

heap on *Ossa* on *Pelion These two mountains, first piled on one another in Virgil's *Georgics*, are proverbial : to add difficulty to difficulty ; to add to

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

The Lover, [being] under the burden of his Mistress's love (which oppressed his heart like Etna), gave such pitiful groans that he at length moved the heavens to pity his distress.

But, because the Fates in their high Court above forbade to make the grievous burden less, all the kind Powers conspired to prove if [some] miracle might redress this mischief :

Therefore, [the Powers] regarding that the load was such as no man might sustain with one man's power and that mild patience should be imported much to the person who should endure an endless pain :

By their decree, soon he was transformed into a patient burden-bearing Ass.

[大意] 恋する男がいた。男は愛する女性の愛に（エトナ山に押し掛かられるように）押し潰され、哀れな呻き声を挙げた。その声が天に届く。しかし、運命の女神たちは天国の高等法廷において重荷を軽減することを禁じる——撤回不可能な——評決を出したため、心優しい神々たちは力を合わせ、何らかの奇跡を起こしてひどい状況を改善しようと企む。神々たちは重荷が人間には背負えないくらい重すぎ、永遠に続く苦痛を抱える人間には忍耐力を備えてやるべきだと考える。神々たちの判決に従って、男はすぐに忍耐強い荷役の驢馬に姿を変えられた。

Fates が構成する high Court やその判決に対する Powers の対処案に対する言及が、作者が法律関係者であることを示唆していると思われるが、この詩の本領は逆説的な痛快さにある。人間では重荷を背負うのが辛いだろうから驢馬にしてやった、というのはオヴィディウス Ovid の *Metamorphoses* 『転身物語』を原型とするパロディとして十分に機能している。

what is already great.

***extensure** the condition of being extended or strained ; extent, OED quotes this line as its earliest example.

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

Gulling 2¹⁸

As when the bright sky has not defaced his glory with black clouds, so my thoughts were void of all discontent ;

And, without mist of passions, all my thoughts were pure and clear, till at last an idle thought, without anxiety, went wandering forth, and took a taste of that poisonous beauty which torments the hearts of lovers so much :

Then, as it happens in a flock of sheep that (when some contagious ill begins first in one sheep) it daily spreads and secretly creeps till all the troop are overtaken,

So one scurvy thought infects all the rest by close neighborhood within my breast.

[大意] 輝かしい天空が黒い雲によって太陽の美しさを汚したことがないように、私の思いに不満など欠片もない。また、情欲という霧が存在しないため、私の思いはどこも純粹で一点の曇りもない。と、そうこうするうちに、不安があるわけでもないのに、無益でお気楽な思いがさ迷い出て、恋する者の心を悩ますような有毒な美を口にしてしまった。すると、(伝染性の病が群れの一頭に始まると)日に日に拡大し、じわじわと進行して、ついには群れの全体に蔓延してしまう、などということが羊の群れに起こるように、一つの思いが——私の胸の中ですぐ近くにあるため——ほかの思いのすべてに感染してしまうのだ。

前半 8 行の “As when ... So ... till” は後半部分の “Then as ... When ... Till ... So” に対応しているように見える。しかし、前半部の As ... so は so が when に対する帰結を持たないため、比喩として完結していない。また、till は so の節の下位に置かれている。後半部の so はその下位に when 節を持つが、till はさらに when 節の下位にある。13 行目の So は 12 行末のペリオドによって、前半の so と接続される可能性を見せるが、実際には後半部分の so と対応している。結果、前半部分の As ... so と後半部分の As ... so は独立した単位の内部に置かれることになる。この前半 8 行と後半 6

18 Cf. Dorus's song, 'My sheep are thoughts' in *Old Arcadia*, book ii.

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

行の間に volta が存在する。それなりに連携する意味の展開が読み込めるかを検討してみたが、両者は単なる並置にとどまっているように思える。

Gulling 3¹⁹

- 20 What Eagle can see her sun-bright eye?
Her sun-bright eye. which lights the world with love.
The world of Love in which I live and die.
I live and die. and try diverse changes ;
I try changes. but I am still the same.
I am the same and never will change.
I never change until my soul flies away.
My soul flies away. and I cease to move ;
I (who am moved by you) cease to move.
I am moved by you (who move all mortal hearts).
All mortal hearts (the eyes of those view your eyes).
Your eyes view (from your eyes Cupid shoots his darts).
Cupids shoots his darts from your eyes and wounds those.
Who honor you and were never Cupid's foes.

この詩は徹底的な〈前辞反復 anadiplosis〉の連続で構成されており、話者の修辭的能力を見せつけるという意図を有しているように思われる。

Gulling 4²¹

-
- 19 “Davies combines the conventions of the eagle beholding the sun with that of the mistress’s sunbright eye’, as in Watson’s *Hekatompathia* 99. and Drayton’s *Idea* 56. The device of gradation, frequently used in sonnets, as in *Astrophil and Stella* 1 and 68, and *Hekatompathia* 68 is expanded extravagantly and cleverly made ridiculous by Davies’s carrying over almost half of each line of verse. He thus takes almost twice the necessary space to present a set of conventional contrarities which succeed brilliantly in saying nothing” (Krueger. p. 392. n3).
- 20 この詩はパラフレーズにそれほどの価値はなさそうである。
- 21 For similar imagery, see Fletcher, *Licia* 7 and Spenser, *Amoretti* 18 and 30.

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

When the all-seeing eyes of heaven saw the hardness of her heart and truth of my heart. they immediately concluded that by divine power our hearts should be turned to other forms.

Then her heart. as hard as flint. became a flint. and my heart. as true as steel. was turned to steel ; and then the flame of kindest love sprang forth between our hearts. and it burned unextinguished.

And the sacred lamp of mutual love burned incessantly long in bright glory.

Until my folly moved her fury to return my service with despite. and to put out the lamp of love with snuffers²² of her pride (otherwise. lamp else would never have extinguished).

Gulling 5 ²³

My eye saw her face which charmed me ; My ear heard her speech which pleased me ; My will liked her fashion which delighted me ; My wit discerned her judgement which confounded²⁴ me ; My heart loved her art which moved me.

Then. Fancy drew so much that she was persuaded to think me kind ; Humor forced so much that she was moved to think me true ; Love enticed so much that she was carried to think me comely ; Conceit persuaded so much that she was compassed to think me valiant ; Thought devised so much that she was wrought to think me wise.

So much so that. Heaven worked to make me scorned by her ; Earth con-

22 *snuffer* : a small hollow metal cone on the end of a handle, used to extinguish a candle by smothering the flame (ODE).

23 Correlative verse (*carmen correlativum*) was highly fashionable in the late sixteenth century. Some examples include Philoclea's song, 'Virtue, beauty, and speech' in *Old Arcadia* book iii. Griffin's *Fidessa*, 47 and a poem sometimes attributed to Raleigh, 'Her face, her tongue, her wit,' William Ringler, Jr. in *The Poems of Sir Philip Sidney* (1961) p. 406 gives other examples. Hoyt Hopewell Hudson in *The Epigram in the English Renaissance* (1947) points out (p. 161) that the device was intended to provide compression ; Davies's parody succeeds partly by contravening this intent, and partly by increasing the number of correlatives to five, leaving no space to say anything.

24 *confound* : cause surprise or confusion in (someone), especially by not according with their expectations (ODE).

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

trived to make my love vile ; Hell labored to make light cast off ; My folly
conspired to make my life base ; and her pride swore to make my dear defied.

So that my heart grieves ; my wit laments ; my will sorrows ; my ear
despairs ; and my eye dies.

Gulling 6²⁵

The sacred Muse (who first made Cupid divine) hath made him naked
and without attire ; but I will clothe him with this pen of mine so that all the
world shall admire his fashion :

[I will make] his Hat of Hope. his Band [collar] of excellent Beauty. his
Cloak of Craft. his Doublet of Desire ; Grief shall twine about him for a Girdle.
his Points of Pride. his Ilet-holes [eyelet holes] of Ire. his Hose of Hate. his
Codpiece of Conceit. his Stockings of Stern Strife. his Shirt of Shame ; his
Garters of gay and slight vain-Glory. his Pantofels [overshoes] of Passions ;
Pumps of presumption and socks of exceedingly sweet sullenness shall adorn
his feet.²⁶

Gulling 7²⁷

The wanton Cupid was admitted into the Middle Temple of my heart. and
gave your Eagle-sighted Wit for pledge so that he would not play any rude,
uncivil part.

-
- 25 The description of Cupid contains elements of two conventions. One is the blazon of Love, favourable, as in *F.Q.* III. xi. 47-8. and unfavourable, as in Dicus's description of him as horned and cloven-footed in 'Poore Painters oft' in *Old Arcadia*, book i. or Ronsard's 'Amour Oyseau'. The other is the allegory of courtly love, in which Cupid is Associated with personifications of such qualities as pride, hope, and ire (these qualities of course appear abundantly in Petrarchan sonnets). Davies's parody consists in dressing Cupid in garments that have no connection with the qualities except alliteration ; thus the sonnet is meaningless. and Cupid is wearing an unconscionable amount of footwear.
- 26 Socks were usually worn under boots (which Cupid is not wearing) to protect the stockings from being soiled or rubbed.
- 27 7-9. These sonnets mock the extensive elaboration of a single image in great literal detail. and the widespread use of legal conceits, as in Shakespeare, *Sonnets* 87. 134 ; Barnes, *Parthenophil*, sonnets 8-10, madrigals 2, 16 ; Drayton, *Idea* 2 ; Griffin, *Fidessa*, 5, 6 ; Percy, *Coelia*, 1 and especially *Zepheria* 5, 6, 20, 37 and 38.

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

Long time. Cupid hided his nature with his art, and there he, sad and grave and sober, occupied the seat ; but at last Cupid began to revel, to break good rules and to pervert orders.

Then Cupid and his young pledge [Wit] were both convened before serious-faced Reason, that old, grave Bencher²⁸, who presented unto Cupid this grave sentence through that sly and secretive knave, Diligence :

That Cupid and Wit should be expelled from the Middle Temple of my heart for ever.

Gulling 8

My case is this. I love Zepheria²⁹ brighte.
Of her I hold my harte by fealtye
Which I discharge to her perpetuallye.
Yet she thereof will never me acquite.
For now supposinge I withhold her righte
She hath distrein'de³⁰ my harte to satisfie
The duty which I never did denye.
And far away impounds it with despite.
I labor therefore justlie to repleave³¹
My harte which she unjustly doth impounde
But quick conceit which nowe is loves high Shreife³²
Returnes it as esloynde³³. not to be founde ;
Then. which the lawe affords. I onely crave

28 法曹学院 (Inn of Court) 評議員。

29 *Zepheria* : a reference to the anonymous sonnet sequence that appeared in 1594 ; it uses legal conceits.

30 *distrein'de* : A legal term ; to distrain is to seize goods in order to force the owner to perform obligation. such as paying a debt or appearing in court ; or to punish him for not having done so.

31 *repleave* : to recover goods distrained, usually upon an undertaking to perform the duty required.

32 *Shreife* : a court officer whose duties include executing writs such as replevin. *replevin* : 【法律】 (一般に) 動産占有回復 [返還請求] 訴訟 : 不法に奪われたり留置された動産の回復を求める訴訟。申立書 : 占有回復を命じる令状 ; コモン・ローの訴訟形式の一つ。

33 *esloynde* : removed out of the jurisdiction of the court or sheriff. *eloin* : 遠くへ持ち去る ; 隠遁する。

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

Her harte for myne in withername³⁴ to have.

Gulling 9³⁵

To Love my lord I doe knightes service owe
And therefore nowe he hath my wit in warde ;
But while it is in his tuition soe
Me thinks he doth intreate it passinge hard.
For thoughe he hathe it married longe agoe
To Vanytie (a wench of noe regarde)
And nowe to full. and perfect age doth growe.
Yet nowe of freedome. it is most debard.
But why should love. after minoritye.
When I am past the one and twentieth year.
Preclude my witt of his sweete libertye
And make it still the yoake of wardshippe beare?
I feare he hath an other Title gott
And holds my witt now for an Ideot.

M^r Davyes.

A Selected Bibliography

Primary Sources

Davies, Sir John. *The Complete Poems of Sir John Davies*. 2vols. Ed. Alexander B. Grosart. 1876.

———. *The Poems of Sir John Davies*. Ed. Robert Krueger. Oxford : Clarendon P.

34 *withername* : in an action of replevin. taking other goods in place of those eloigned.

35 The custom of wardship was a profitable one for the guardians and often a disadvantage to the wards. Technically, the Crown was the guardian of all minors who held land by knight-service (i.e. by a grant from the monarch in exchange for military service, which meant virtually all the knights and peers of the realm), all unmarried female orphans, and all idiots. In practice the Court of Wards granted guardianship to individuals, who could collect the income of the estates, and dowries, and whose consent was required for marriage and for selling the property. The number of appeals and complaints attests frequent conflicts of interest between guardians and wards.

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

- 1975.
- Davies, John. of Hereford. *The Complete Works of John Davies of Hereford*. Vol. 2. Ed. Alexander B. Grosart. 1878.
- Elizabethan Sonnets*. Ed. Maurice Evans. London : J. M. Dent. 1977.
- Percy, William. *The Sonnets of William Percy. 1594*. Ed. Alexander B. Grosart. 1877.
- Sidney, Sir Philip. *The Poems of Sir Philip Sidney*. Ed. William Ringler. Oxford : Oxford UP. 1962.
- . *Sir Philip Sidney : The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford : Oxford UP. 1994.
- . *Sir Philip Sidney : The Major Works*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford : Oxford UP. 2002.
- . *A Defence of Poetry*. Ed. Jan van Dorsten. Oxford : Oxford UP. 1966.
- . *The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford : Oxford UP. 1985.
- . *The Countess of Pembroke's Arcadia (The New Arcadia)*. Ed. Maurice Evans. Harmondsworth : Penguin. 1977.
- Spenser, Edmund. *Edmund Spenser : The Shorter Poems*. Ed. Richard A. MacCabe. Harmondsworth : Penguin. 1999.
- . *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Ed. William A. Oram, Einer Bjorvand, Ronald Bond, Thomas H. Cain, Alexander Dunlop, and Richard Schell. New Haven : Yale UP. 1989.
- Zepheria. Reprinted From the Original Edition of 1594*. Publication of the Spenser Society. 1869.
- Elizabethan Sonnets*. vol. 1. Intro. Sidney Lee. Westminster : Archbold Constable and Co., Ltd. 1904.
- The Penguin Book of Renaissance Verse*. Ed. David Norbrook and H. R. Woudhuysen. Harmondsworth : Penguin. 1992.
- Petrarch in English*. Ed. Thomas P. Roche, Jr. London : Penguin. 2005.
- Silver Poets of the Sixteenth Century : Sir Thomas Wyatt, Henry Howard, Sir Walter Raleigh, Sir Philip Sidney, Mary Sidney, Michael Drayton and Sir John Davies*. Ed. Douglas Brooks-Davies. London : J. M. Dent. 1992.

Secondary Sources

- Anglo, Sydney, ed. *Chivalry in the Renaissance*. Woodbridge : The Boydell P. 1990.
- Alexander, Gavin. *Writing After Sidney : The Literary Response to Sir Philip Sidney. 1586-1640*. Oxford : Oxford UP. 2006.
- Attridge, Derek. *Well-Weighed Syllables : Elizabethan Verse in Classical Metres*. Cambridge : Cambridge UP. 1975.
- Bednarz, James P. *Shakespeare & the Poets' War*. New York : Columbia UP. 2001.

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence : A Theory of Poetry*. Oxford : Oxford UP. 1973.
———. *A Map of Misreading*. Oxford : Oxford UP. 1975.
- Brink, Jean R., and William F. Gentrup. eds. *Renaissance Culture in Context : Theory and Practice*. Aldershot : Scholar P. 1993.
- Burt, Stephen., and David Mikics. eds. *The Art of the Sonnet*. Cambridge, Mass. : Harvard UP. 2010.
- Buxton, John. *Sir Philip Sidney and the English Renaissance*. 3rd ed. London : Macmillan. 1987.
- Carpenter, Thomas, and Derek Attridge. eds. *Meter and Meaning : An Introduction to Rhythm in Poetry*. Abingdon : Routledge. 2003.
- Christian, Margaret. “*Zepheria* (1594 ; STC 26124) : A Critical Edition.” *Studies in Philology* 100. No. 2 (Spring, 2003). 177-243.
- Cousins, A. D. and Peter Howarth. ed. *The Cambridge Companion to the Sonnet*. Cambridge : Cambridge UP. 2011.
- Dubrow, Heather. *Echoes of Desire : English Petrarchism and Its Counterdiscourses*. Ithaca : Cornell UP. 1995.
- Eagleton, Terry. *How to Read a Poem*. Blackwell. 2007.
- Farmer, Norman K. Jr. *Poet and the Visual Arts in the Renaissance England*. Austin : U of Texas P. 1984.
- Fowler, Alastair. *Triumphal Forms : Structural Patterns in Elizabethan Poetry*. Cambridge : Cambridge UP. 1970.
- Fraistat, Neil. ed. *Poems in Their Place : The Intertextuality and Order of Poetic Collections*. Chapel Hill : The U of North Carolina P. 1986.
- Fumerton, Patricia. *Cultural Aesthetics : Renaissance Literature and the Practice of Social Ornament*. Chicago : U of Chicago P. 1991. [生田省悟. 箭川修. 井上彰訳. 『文化の美学—ルネサンス文学と社会的装飾の実践』. 東京 : 松柏社. 1996年]
- , and Simon Hunt. eds. *Renaissance Culture and the Everyday*. Philadelphia : U of Pennsylvania P. 1999.
- Fussel, Paul. *Poetic Metre and Poetic Form*. Rev. ed. McGraw-Hill. 1979.
- Greene, Donald. *Post-Petrarchism : Origins and Innovations of the Western Lyric Sequence*. Princeton : Princeton UP. 1991.
- Guillory, John. *Poetic Authority : Spenser, Milton and Literary History*. Columbia UP. 1983.
- Heninger, S. K., Jr. *The Cosmographical Class : Renaissance Diagrams of Universe*. San Marino : Huntington Library. 1977.
- , *Sidney and Spenser : The Poet as Maker*. University Park : Pennsylvania State UP. 1989.
- , *The Subtext of Form in the English Renaissance : Proportion Poetical*. University Park : Pennsylvania State UP. 1994.
- , *Touches of Sweet Harmony : Pythagorean Cosmology and Renaissance Poetics*. San Marino : Huntington Library. 1974

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

- Hirsch, Edward, and Evan Boland. eds. *The Making of a Sonnet*. Norton. 2008.
- Hobsbaum, Philip. *Metre. Rhythm and Verse Form*. Routledge. 1996.
- Hollander, John. *Melodious Guile : Fictive Pattern in Poetic Language*. New Haven Yale UP. 1983.
- , *Rhyme's Reason*. 3rd ed. Yale UP. 2000.
- Kennedy, William J. *Rhetorical Norms in Renaissance Literature*. New Haven. Yale UP. 1978.
- Levin, Phillis. ed. *The Penguin Book of the Sonnet : 500 Years of a Classical Tradition in English*. Penguin. 2001.
- Low, Anthony. *The Reinvention of Love : Poetry. Politics and Culture from Sidney to Milton*. Cambridge : Cambridge UP. 1993.
- Marotti, Arthur F. *Manuscript. Print. and the English Renaissance Lyric*. Ithaca : Cornell UP. 1995.
- Martines, Lauro. *Society and History in English Renaissance Verse*. Oxford : Basil Blackwell. 1965.
- Maynard, Winifred. *Elizabethan Lyric Poetry and Its Music*. Oxford : Clarendon P. 1986.
- Pawlish, Hans S. *Sir John Davies and the Conquest of Ireland : A Study in Legal Imperialism*. Cambridge : Cambridge UP. 1985.
- Reed, Edward Bliss. *English Lyrical Poetry : From Its Origins to the Present Time*. New Haven : Yale UP. 1912.
- Reese, Guetave. *Music in the Renaissance*. Rev. ed. New York : W. W. Norton. 1959.
- Roche, Thomas P. Jr. *Petrarch and the English Sonnet Sequences*. New York : AMS P. 1989.
- Rose, Mark. *Heroic Love : Studies in Sidney and Spenser*. Cambridge. Mass. : Harvard UP. 1968.
- Sanderson, James L. *Sir John Davies*. Boston : G. K. Hall & Co. 1975.
- Saenger, Michael Baird. "Did Sidney Revise Astrophel and Stella?" *Studies in Philology* 96-4 (1999) : 417-38
- Spiller, Michael R. G. *The Development of the Sonnet : An Introduction*. London : Routledge. 1992.
- Strand, Mark, and Evan Boland. eds. *The Making of a Poem*. Norton. 2000.
- Waller, Gary F. and Michael Moore. eds. *Sir Philip Sidney and the Interpretation of Renaissance Culture*. London : Croom Helm. 1984.
- Warley, Christopher. *Sonnet Sequences and Social Distinction in Renaissance England*. Cambridge : Cambridge UP. 2005.
- Woudhuysen, H. R. *Sir Philip Sidney and the Circulation of Manuscripts. 1558-1640*. Oxford : Clarendon P. 1996.
- 箭川 修. 「〈文化の美学〉と『アストロフェルとステラ』」. 『新歴史主義からの逃走』. 東京 : 松柏社. 2001.

A Selected Bibliography

- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence : A Theory of Poetry*. Oxford UP. 1973.
———, *A Map of Misreading*. Oxford UP. 1975.
- Burt, Stephen. and David Mikics. *The Art of the Sonnet*. Harvard UP. 2010.
- Cousins, A. D. and Peter Howarth. ed. *The Cambridge Companion to the Sonnet*. Cambridge UP. 2011.
- Fussel, Paul. *Poetic Metre and Poetic Form*. Rev. ed. McGraw-Hill. 1979.
- Guillory, John. *Poetic Authority : Spenser, Milton and Literary History*. Columbia UP. 1983.
- Hirsch, Edward. and Evan Boland. eds. *The Making of a Sonnet*. Norton. 2008.
- Hobsbaum, Philip. *Metre, Rhythm and Verse Form*. Routledge. 1996.
- Hollander, John. *Rhyme's Reason*. 3rd ed. Yale UP. 2000.
- Jones, Emrys. ed. *The New Oxford Book of Sixteenth-Century Verse*. Oxford. 1991.
- Levin, Phillis. ed. *The Penguin Book of the Sonnet : 500 Years of a Classical Tradition in English*. Penguin. 2001.
- Norbrook, David, and H. R. Woudhuysen. eds. *The Penguin Book of Renaissance Verse*. Penguin. 1992.
- Strand, Mark, and Evan Boland. eds. *The Making of a Poem*. Norton. 2000.

Online news を使った大学生の 英文リテラシー育成の試み

吉 村 富美子

I. 序 論

この論文では、大学生の英文の読み書き能力の育成を目的とした online news を用いての統合的な英語指導の試みについて報告する。筆者は、2000 年に出した「大学におけるレポート・ライティングの教え方について」という論文の中で、高校と大学における読み書きの相違を基に、大学におけるレポート・ライティング指導についての提案を行った。その際に大学で期待される読み書きの仕方を促進する道具としてのインターネットの可能性に言及したが、その後の ICT (Information and Communication Technology) 環境の変化によって、提案した読み書きの仕方を指導する環境が整ったため、2016 年度の英語コミュニケーション演習 I~IV の授業において online news を使った英語指導を試みた。

II. 2000 年の論文の概要とその後のインターネット環境の進化

1. 2000 年の論文の概要

2000 年の論文では、Sociocultural Constructivism の考え方 (Duffy & Cunningham, 1996, p. 175) を理論的枠組みとして、読解過程を「テキストと読み手の読む目的と読者の持つ背景知識が相互作用を及ぼしながら、意味を構築していく過程」と捉え、作文過程を「書き手と書く課題と書き手の書く過程が影響しあいながら新しい意味が創り出されていく過程」と定

義し (p. 51), 高校までの読み書きと大学で期待される読み書きの相違点を 6 つ特定した。具体的には, ディスコースの違いや読解過程の違い, 読み書きの主体の違い, 文章を書く目的の違い, 複数の文献を読んで書くこと, 書く分量の増加, 情報の出典を明示することの 6 つである。

大学に入ると, 文献の内容をただ単に理解するだけではなく, メタ・ディスコース¹等に注意しながら文献そのものの信憑性や自分の目的や他の文献との関連性まで考慮して読むことが期待されるようになる。また, 高校までと異なり, 大学では自分が主体となって学習を進めなければならない。大学でリサーチペーパーを書く場合は, 自分のレポートの目的に沿った文献を選択し自分の視点で読むという選択的読解 (selective reading) を行う。そして, 自分の目的のために情報を新たに構築し直すということをする。そのためには, 文献の中の情報の関連性について熟考する必要が出てくる。また, 大学においては, あるトピックについて理解するために, 複数の文献から情報を集めてその全体像を理解しようとする。もともとは別々の目的のために書かれた複数の文献を読んで, 自分の目的のためにそれを統合しようとする時, 意味の再構築という側面は, より強調されることになる。大学においては, 書く分量も増加する。分量が増加すれば, それだけワーキングメモリへの負担は増加するので, ライティング・プロセスを分けて書き進める等の書き方の工夫をしなければならなくなる。さらに, 大学で書くレポートにおいては, 出典を明示することが求められる。こうすることで, 他人の文章や他人の意見, あるいは他人の研究から得た

1 メタ・ディスコースとは, ディスコース (discourse) についてのディスコースである。ディスコースとは, 談話のことで, 話されたり書かれたりした文章において意味のまとまりを有する複数の文の連続体を指す。ディスコースのディスコースであるメタ・ディスコースの役割としては, 主張の信憑性について述べたり, 筆者の態度を示したり, 読者を筆者との対話に引きこむ等がある。(Crismore, 1989)

情報をどのように統合しながら自分の意見を構築していったかを示さなければならない。

次に、上記のような高校までと大学における読み書きの相違を踏まえて、大学社会で期待される読み書きの仕方を学生が身につけるための指導法についての提案を行った。具体的には、(1) 書くという行為を学生主体の活動だと認識させること、(2) 文献を読む際にその重要性や他の文献との関連性を考慮した読み方をさせること、(3) レポートを書く目的を明確に意識させながら文献検索、読解、レポート・ライティングを指導すること、(4) 複数の文献を読ませてレポートを書かせること、(5) ワーキングメモリを効率よく使えるようにライティング・プロセスをガイドすること、(6) 情報の出典を明らかにさせることの6つである。最後に、インターネット上の読み書きがこの大学社会で期待される読み書きの仕方を促進する可能性について言及した (pp. 59-60)。

インターネット上には膨大な数の文献が存在するので、すべての情報に目を通すことはできない。そこで、情報の選択が必要になるわけだが、それを可能にするのが検索エンジンを使ったキーワード検索である。しかし、このためには検索の目的が明確でなければならない。そして、読み手はこのようにして収集した情報の全体的な理解の枠組みを自分で創り出さなければならない。また、インターネット上の文献は、その信憑性において大きなばらつきがあるため、読み手は情報の妥当性、信憑性、自分の目的との関連性等を考慮して読まざるを得ない。さらに、インターネットには、ハイパーテキストが使われている。ハイパーテキストとは、リンクという機能によってさまざまな情報の関連性を実現できるテキストのことで、紙上では直線的な読み方しかできないが、ハイパーテキスト上では上へ下へ、全体から細部へ、関連性のある別のページへと自分の目的にあわせた読み

方ができる。書き手は、このようにして集めた情報を自分の目的のために再構築しなければならない。インターネット上の読み書きのこれらの特徴が大学で必要とされる読み書きと類似しているため、インターネットを用いることで大学でのレポートライティングを目に見える形で指導でき、学生たちの読み書き能力の育成に貢献できるのではないかというのがその主旨である。

2. 2000 年以降の ICT 環境の変化

2000 年以降、ICT 環境は大きく変化した。それは、インターネット上の情報量が増加の一途を辿っただけではない。2004 年に Web 2.0 という造語が作られたように、ICT 技術の発達私たちの生活様式そのものを大きく変化させたのだ。ここ十年を振り返ると、Facebook, Twitter, Instagram 等 SNS (Social Networking Service) としての利用が増加し、スマートフォンの普及とも相まって、インターネットはより身近な存在となった。現在の大学生は、デジタルネイティブとかネットジェネレーションと呼ばれ、生まれた時からパソコンやインターネットが存在し、常時生活の中でインターネットとつながっている世代である。調べたいことはすぐに手元のスマートフォンで調べることができる。従来の紙媒体と同じくらい、あるいはそれ以上に、インターネットから情報を得ている可能性のある世代もある。学生のインターネット利用が日常化した今だからこそ、インターネットを利用して大学生に必要とされる読み書き能力をつけさせることができるのではないかというのがこのアクション・リサーチ²の動機であった。

2 アクション・リサーチ (action research) とは、教員が授業や学習過程を研究するプロセスのことで、教員が研究課題を設定して、その解決方法を試み、授業や学習者の様子からデータを取り出し、効果を測定する方法である (British Council, 2002)。研究者と授業者が同じであるため、結果を一般化することは

3. なぜ online news か

この研究においては、インターネット上の複数の online news を用いて学生に読み・書き・話す指導を行い、その効果を分析した。この中には、「書くために読む」(reading to write³)と「様々な文献を読んで書く」(writing from sources⁴)が含まれている。なぜ online news なのかというと、まずほとんどの online news は従来の新聞社が提供しているため、情報の信頼性がある程度保証されているからという理由と、新聞記事の特徴である個々の記事は比較的短く一般の読者向けに書かれているので専門知識を必要としないという特徴があるからだ。さらには、online news を含む新聞記事は、書き言葉 (academic English, in Gillett, n.d.; the language for schooling, in Scheppegrell, 2004) で書かれており、語彙の難しさ、複雑な文構造、名詞化⁵による情報の凝縮等、書き言葉特有の特徴を持っている。これらの特徴は、大学で用いる教科書や大学生が読むべき論文と共通している。次に、online news は紙媒体の新聞記事とは違い、検索エンジンを用いたキーワード検索ができるため、読む目的によって自分の読みたい記事に瞬時にアクセス可能だからである。このため、一つのトピックについて、複数の情報源から情報を収集できる。しかも、そのほとんどが無料か安価である。紙媒体の英字新聞が日本では手に入れにくく高価であるのに比べると、

難しいが、教育においては主に授業改善の方法として使用されている。

- 3 例えば Spivy (1995) は、書くために読む (reading to write) 場合は、単純に読むことと書くことを組合わせるのではなく、書くという目的自体が読解過程に影響を与えると述べる。
- 4 Wiley and Voss (1999) の実験結果は、複数の文献を読んでレポートを書く (writing from sources) ほうが一つの文献を読むよりも意味の再構築が促進されること (transformed) を示している。
- 5 名詞化とは、本来動詞や形容詞であったものを名詞形として文章中に用いることである。名詞化されることによって文章の主語や目的語、前置詞の目的語として用いることができるようになり、より多くの情報を一文中に凝縮することが可能になる。

Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み

online news は入手しやすい。いくつかの情報源からの記事を比較しながら読むことで、その内容や書き方を比較できるというメリットもある。国内外の情報源による比較を行ったり、書き手による比較を行うこともできる。日本の新聞社が提供している英字新聞の中には日本語の記事を英語に翻訳したものもあり、日本語の記事とその英語翻訳版を比較することも可能だ。

このように、大学生が読むにふさわしい英文テキストとしての特徴もっていることとインターネットの利便性を利用できるものとして online news は格好の英語教材となりうると考えた。

III. インターネット上の online news を使ったアクション・リサーチ

1. 研究課題

このアクション・リサーチの研究課題は、インターネット上の online news を使った統合的な英語指導によって、大学で期待される文章の読み書き能力を学生に身につけさせることができるかである。具体的には、大学特有の (1) 学生主体の読み方, (2) 批判的な読み方, (3) それに基づく情報の再構築を促すことができるかどうかである。さらには、今回は英文テキストを用いたので、(4) 英文の読解力と作文力を身につけさせることができたかどうかも研究課題とした。

2. 研究対象の授業

この研究は、2016年度の英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳの授業を対象として行った。英語コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱは3年生用の授業で、Ⅱ・Ⅳは4年生用の授業だが、3年生と4年生の合同クラスであるため、英語コミュニケーション演習のⅠ・ⅢとⅡ・Ⅳでは同じ授業を3年生と4

Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み

年生が一緒に履修している。この授業の履修者は、3年生8名、4年生7名であった。

前期の授業では、英語で書かれた online news 一つをよく読んで理解し、それをまとめてわかりやすく英語で説明すること (summarizing) を目標とした。これは、先行研究 (e.g., Karbalaei & Amoli, 2011; Katims & Harris, 1997; McNamara, 2004) において、読解した内容を自分の言葉で説明することが内容理解を深めることが報告されていることによる。授業では、まず教員がモデルを使って online news の読み方と要約 (summarizing) や言い換え (paraphrasing) の方法を教えた。次に、学生たちは、それぞれ自分が興味のあるトピックを決定し、online news を探して読み、その内容をわかりやすく説明するために要約や言い換えの工夫を行い、調べた内容について発表会で口頭発表を行った。最後に、学生たちはその発表と同じ内容についてレポートにまとめて提出した。

後期の授業の目標は、一つのトピックに関する3つ以上の online news を読んで、それらをまとめて英語で説明することであった (writing from sources)。近年、引用文を書くことはトピックについての理解を深める可能性があることを示唆する研究 (e.g., Wiley & Voss, 1999) が報告されている。そこで、後期は、さまざまな視点から書かれた文献を引用しながら選んだトピックについて原稿を書き、それを発表するという課題を出した。まず、教員がモデルとなる英字新聞記事とその翻訳もとである日本の新聞記事、さらには同じトピックについての英語圏の英字新聞記事を比較しながら、何をどう伝え、どんな表現が用いられているかに注目させたり、文献間の相似点や相違点に注目させたりしながら、新聞記事の読み方を教えた。その後、学生たちは、自分の興味のあるトピックについて3つ以上の文献を探して読み、その概要や文献間の相似点・相違点をまとめ、その比

較に基づく考察について英語で口頭発表を行った。さらには、引用のルールについての説明に基づいて発表と同じ内容についてレポートとしての形式を整えて英文レポートを提出した。Online news は、基本的には日本の英字新聞記事とその日本語版、さらに同じトピックに関する外国の英字新聞記事を見つけるように指示した。

3. 分析方法

研究課題の検証には、後期の最終日に提出してもらったレポートと最終日に書いてもらった事後アンケートの回答をデータとして用いた。2000年の研究が「複数の文献を読んで書くレポート・ライティング」(writing from sources) を中心とした研究であったので、この研究との関係上、前期の授業 (summarizing) のレポートやアンケートの回答、前・後期の口頭発表については、今回の研究データとしては除外した。研究データに使ったレポートの分析には、学生たちが書いたレポートの英文の分量、引用文献数、引用文献の内訳については量的分析を行い、英文の内容や英語表現については質的分析を行った。事後アンケートの質問では、(1) 課題遂行にあたって、頑張った点、工夫した点、よくできた点、(2) 頑張りが足りなかった点や難しいと感じた点、(3) 課題に取り組む中で考えたこと、感じたこと、学んだこと、(4) 課題遂行の各段階 (自分が決めたトピックについて複数の文献を探して読む、読んだ文献をまとめる、発表原稿を書く、原稿の推敲と校正、口頭発表) で英語学習者としての自分について考えたこと、(5) 振り返ってみて、自分は何が得意 / 不得意か、何を楽しいと思うかの5点を尋ねた。この事後アンケートは記述式であったので、まず回答を質問ごとにまとめて、リストとして書き出した。その後、記述の多かった項目ごとに回答をまとめ直し、課題遂行のプロセスの順序で並べ直した。

IV. 研究結果

学生たちが書いた英文レポートの特徴の概要は次のとおりである。レポートの英文の平均的な分量は、A4 用紙シングルスペースで約 1.88 枚 (約 2,000 words) で、引用文献数の平均は 3.58 個であった。引用文献の内訳は、外国で出された英語の online news (42.5%)、日本で出された英語の online news (27.5%)、日本で出された日本語の online news (7.5%)、その他 (22.5%) である。代表的な引用文献としては、*The Guardian*, *The New York Times*, *The Mainichi*, *The Japan Times* 等がある。Online news 以外では、スポーツ団体や個人のホームページ、Wikipedia, Twitter, Google 翻訳などが用いられていた。学生たちが選んだトピックは、大まかに分けると下の 3 つに分類できる。1. Brexit, アメリカ大統領選, 天皇の退位問題など政治的なトピック, 2. サッカーの判定, 新しく日本にできたバスケットボールリーグの話題など自分が興味のあるスポーツやスポーツ選手について, 3. 「ポケモン Go」, 映画「君の名は」「スマップ解散」等, 当時日本で話題になっていた事柄についての日本と外国における評価の比較についてである。英語の特徴として全体的に目立ったのが次の点である。このレポートは口頭発表の原稿をレポートの形式に整えたものであるため、聴衆を意識したせい、原文に用いられていた書き言葉を自分の言葉に変えて説明することがかなりうまくできていた。ただ、レポートを書いた後の校正が不十分で、文法間違いが多く見られた。

事後アンケートの結果は、以下の通りである⁶。記述の多かった項目について、トピックの決定から、文献の収集、読解、まとめ、発表原稿の作成、

6 () 内は、学生たちのコメントの内容を読者にわかりやすくするために筆者が説明を加えた部分である。

推敲, 校正, 口頭発表に至るまで, 工夫した点, 苦労した点, 気づき等をまとめた。

トピックの決定を自分で行ったことに関しては, ほぼ全員の学生が「楽しかった」とか「よかった」と回答し, 好意的に受け止めていることがわかった。また, 自分なりに工夫した点について尋ねたところ, 例えば, 「チャンキング⁷で(記事の英文を)細かく区切って, 一つひとつ辞書を引いて和訳した。」「なるべく多くの視点から意見を集めた。事実を伝えるだけでなく, この問題が大きくなった要因を自分なりに考えた。」「記事の内容だけでなく(トピックである)内村選手について最初に調べた。」「新聞+Twitter も読み込み, #PokemonGo で調べ, ユーザーは Twitter で何を発信しているか調べた。」等の回答があり, 課題遂行において, 英字新聞を解説するための工夫やさまざまな情報源を調べてトピックについて理解を深めるための工夫をしていることがわかった。複数の文献を読んでまとめるという作業については, 「日本と外国の視点を互いの視点から見るのが楽しかった。」という意見がある一方で, 「構想を(自分で)考えるのがなかなか大変でした。」「テーマについて多数の記事があり, 求めている資料か判断するのが大変だった。」「資料を多く集めすぎ, 読みにだいぶ時間をかけてしまったのが良くなかった。また, まとめきれず自分の言いたいことをうまく言い切れなかった。」「新聞を読むことに時間がかかり, その題材を自分のレポートにするために深く読むことができませんでした。もっと違う視点を見つけることができるように思いました。」「各国の新聞に関連性を持たせるのが難しい。」等の情報統合の難しさを指摘した回答も多くあった。

7 チャンキング(chunking)とは, 意味のまとまりごとにテキストを理解をしていく方法で, 長く複雑な英文を読む場合に読み手の理解を補助する方法である。

Online news を使った大学生の英文リテラシー育成の試み

この課題を遂行する中で気づいたことについて尋ねたところ、「複数の国の英字新聞を読んで、国によって報道のされ方や説明の仕方に違いや特徴がみられてとても勉強になりました」「日本と外国の考え方はほとんど違って、改めて文化の違いを感じられた。」「私は Online news を見ることは意外と好きなのかなと思いました。日本の記事と比較して読んでみると異なっている部分を見つけて、なぜなのかという考えを持ち、調べる学習は自分に向いていると感じました。」のような回答に見られるように、文化による考え方の違いや報道の仕方の違いに気づいたり、調べることの楽しさに気づいたようであった。ただ、英語で発表原稿を書いたり、推敲や校正をするという作業については、「書くことに関してはまだ力不足だと感じた。」「自分の英語で書く、間違い文法等を訂正することに関しては不得意だと感じました。」のような英文ライティングの大変さや難しさを指摘する感想が多かった。

英語学習者としての自分について振り返ってもらう質問に対しては、「新しい情報を読む、知ることは楽しいのですが、その内容を自分の言葉にすることが苦手です。その訓練が自分には必要だと感じました。」「レポートを書く際、文と文のつながりの言葉の知識が足りなかったので、少し違和感がありました。文章の構成をせっかく覚えたので、次はつながりの言葉にも注意して、少しでもよりよい英文レポートに完成させたいと思います。」のようなコメントに見られるように、自分の英語力や英語学習について客観的に分析し改善の工夫について言及した学生もいて、知識やスキルの不足への気づきを積極的にとらえて次の学習に生かそうとしていたことが伺える。なお、先の研究との関係上研究課題には入れなかったが、口頭発表については多くの学生が楽しかったというコメントを書いていた。また、聴衆を意識したことで、わかりやすくするためのさまざまな工夫を各学生

が行っていることもわかった。

V. 結果の考察

ここでは、上記のレポートの量的・質的研究結果と事後アンケートの分析結果を具体的な研究課題に沿って考察する。

まず、研究課題(1)の学生主体の文献の読み方ができたかどうかについては、全員が自分の興味のあるトピックを中心にインターネットを使って情報収集を行うことができたことと、この検索をインターネットのキーワード検索機能が促進したことは間違いないので、効果的であったと言える。学生のアンケートへの回答の中に文献間の情報統合の難しさを指摘したものが散在したことからも、学生たちが自分が研究の主体となり、一つの文献に依存することなく自分の目的のために文献を利用したことがわかる。

研究課題(2)の情報そのものの信憑性や自分の研究トピックとの関連性などを考慮した批判的な読み方(critical reading)ができたかどうかについては、学生たちのレポート中に情報源による意見や報道の相違についての記述が多くみられたことと、アンケートへの回答の中で文化による意見の違いや報道の違いに気づいたというコメントが多かったことから効果があったと言える。学生の中には、Twitter, Wikipedia, Google 翻訳を資料として用いた学生もいた。資料としての信憑性が疑問視されるこれらの機能については、学生たちはそれらを信頼できる情報源として扱うのではなく、トピックについての全体像を知るための手掛かりとして Wikipedia を用いたり、自分の選んだトピックへの生の反応を知るために Twitter 上のコメントを収集したり、英字新聞の内容と Google 翻訳を比較し Google 翻訳機能自体の検証を行ったりと、それぞれの機能の特質をよく理解して自

分の目的のために利用していた。ちなみに、Google 翻訳を用いた学生は、Google 翻訳を使用することによる長い文章の概要理解への有効性と短い文の翻訳の正確性を指摘していた一方で、助詞の誤りの多さと一文が長い場合の誤りの増加を指摘していた。

研究課題(3)の複数の情報源からの情報の再構築(writing from sources)については、情報統合の大変さや難しさについてのコメントが多く、学生が苦労した様子が伺える。学生のレポートの中には文献を比較しその視点や意見の違いを中心にレポートを書いている学生がいた一方で、異なる情報を異なる文献から収集しそれを組合わせただけのレポートもあり、情報を自分なりに評価して読みその信憑性まで考慮する読み方ができた学生と、情報を事実として読み情報そのものの質について疑問をもつ段階までいかなかった学生がいたことがわかった。しかしながら、複数の情報源から情報を得たからこそ、Duffy and Cunningham (1996)があらゆる分野における問題解決の成功の要件としてあげている、原文の著者の理解を離れて(decentering)、トピックに関する理解の枠組み(the overall structure of a topic)を自分自身で作り上げなければいけないという意識を多くの学生が持ったと考えると、学生たちは大学で求められる批判的な文献の読み方に近づいたと言えるのではないだろうか。

最後に、研究課題(4)の英文の読解力と作文力が身についたかどうかについては、アンケート調査からは、読解に時間がかかったり自分の言葉にするとところで格闘したりして、英文の読み書きに苦労していた様子がうかがえた。Online news で使われる書き言葉の特徴である、複雑な語彙、長く複雑な文構造、情報の凝縮等の特徴が文献理解を阻害したのではないだろうか。ただ、学生たちが書いたレポートからは、情報源である online news をなんとか読みこなし、原文の表現をそのまま用いるのではなく、

自分の言葉で説明することができていた。

VI. 結 論

佐渡島（2014）は、「インターネットで情報がほしいままに手に入るようになった今、必要とされる能力は、《情報を再定義する力》ではないだろうか。ふんだんに与えられる、様々な立場の様々なジャンルの文章—それらを個々に読み取り、目的に合わせて新たに意味付けし、取り込む。こうして自身の意見を構築する。それが現代の若者たちに求められる力である。」（p. 23）と述べている。筆者は、2000年に出した論文において、このような能力の育成をインターネット利用が促進する可能性について述べたが、今回のアクション・リサーチを通して、インターネット上の複数の online news 記事を用いて読み書き発表を行う統合的な英語指導は、大学生が身につけるべき英文リテラシーの育成に貢献する可能性が大いにあるという確信をもった。

この研究の限界として、次の点が挙げられる。まず、アクション・リサーチの性質上、研究者と授業者が同じであるためデータの解釈に主観が入っている可能性がある。統制グループがないため、データに表れた特徴が今回の指導によるものかどうかの特定はできない。また、研究の参加人数が少ないため、研究結果を一般化することはできない。この研究結果は、上記の点を考慮して解釈されなければならない。

ただ、上記の研究の限界はあるものの、今回の研究では、2000年の論文の中では可能性の示唆にとどまっていたインターネットが大学で期待される読み書き能力の育成に貢献する可能性について、不十分ながら実際教室指導に応用し、その効果について報告できた点において意義があると考ええる。今後ますます ICT が発達していくことが予想されるが、それをど

のように授業で活用すると学生の学習の深化に貢献できるのかについては、これからも研究を継続していかなければならない。

参 考 文 献

- 佐渡島沙織「アカデミック・ライティング教育と情報リテラシー：《情報を再定義》し意見を構築できる学生を育てる」『情報の科学と技術』64巻1号, pp. 22-28.
- 吉村富美子「大学におけるレポート・ライティングの教え方について」『九州情報大学研究論集』第2巻, 第1号, pp. 49-62.
- British Council (2002). Action research. Retrieved from <https://www.teachingenglish.org.uk/article/action-research>
- Crismore, A. (1989). *Talking with readers: Metadiscourse as a rhetorical act*. New York: Peter Lang.
- Duffy, T. M. & Cunningham, D. J. (1996). Constructivism: Implications for the design and delivery of instruction.” In D. H. Jonassen (Ed.), *Handbook of research for educational communications and technology* (pp. 170-198). New York, NY: Simon & Schuster Macmillan.
- Gillett, A. (n.d.). Features of academic writing. Retrieved from <http://www.uefap.com/writing/feature/featfram.htm>
- Karbalaei, A. & Amoli, F. A. (2011). The effect of paraphrasing strategy training on the reading comprehension of college students at the undergraduate level. *Asian EFL Journal*, 13 (3), 229-244.
- Katims, D. S. & Harris, S. (1997). Improving the reading comprehension of middle school students in inclusive classrooms. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 41 (2), 116-123.
- McNamara, D. S. (2004). SERT: Self-explanation reading training. *Discourse Processes*, 38, 1-30.
- Schleppegrell, M. J. (2004). *The language of schooling: A functional linguistics perspective*. New York, NY: Routledge.
- Spivy, N. N. (1995). Written discourse: A constructivist perspective. In L. P. Steffe & J. Gale (Eds.), *Constructivism in education* (pp. 313-329). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Wiley, J. & Voss, J. F. (1999). Constructing arguments from multiple sources: Tasks that promote understanding and not just memory for text. *Journal of Educational Psychology*, 91 (2), 301-311.

主人公で読む G. チョーサー 『トロイルスとクリセイデ』

柴田良孝

はじめに

G. チョーサーの長編物語詩『トロイルスとクリセイデ』は、古典時代のトロイア戦争を背景にしながら、トロイアの王子トロイルスと美貌の未亡人クリセイデが展開する愛と戦争が絡んだ中世の宮廷ロマンスである。

どんな言語でも、また、近代の小説家のいろいろな試みにおいても、これほど完全に均整の取れた構成を持つ物語はないし、これほど適切な叙述法を見出す物語はない。あるいは、このように高い芸術的価値を持つ長詩は、それ以後の 600 年間には英語では見られなかった。*Beowulf* (8c.) や J. Milton の *Paradise Lost* (1667 年) の壮麗さや華美さは持たないにしても、イギリスの narrative poetry のこれら最高峰と同列に挙げ得るほどの独自のすぐれた諸点を持っている、などと評されているチョーサーの代表作である。

そして、この作品の最大の問題点は、最終巻において、世間を離れ天上の至福に達したトロイルスが、自分の死を悼んでいる人々が泣き悲しんでいるのを見て「笑う」のであるが、この「笑い (cosmic laugh)」とはいかなる意味を持っているのか、である。

本講座では、この作品解釈の最大の問題について、一つの私見を導くというよりは、諸説を提示して、聴衆の皆様がこの問題をどうとらえるかの糸口を提供したいと考えている。

I. トロイルス版の、そしてクリセイデ版の『トロイルスとクリセイデ』

まず、本講座のテーマに則り、チョーサーが二人の主人公、トロイルスとクリセイデにどんな性格を与えそしてどんな役割を期待したのかを明確にするために、この物語から二人の主人公を抜き出して、それぞれにスポットを当て、物語を読み直してみたいと思う。なぜならこのことによって、この物語の最大の問題の解決の道筋をより明らかにできると考えるからである。

(1) トロイルス版『トロイルスとクリセイデ』

トロイルスについて、語り手は、終始、恋には奥手ながらも「若くて、澁瀬として、強く、ライオンのように勇敢であり、真実であることは揺るぎなく、現在はおろか未来永劫、この世が続く限り、最高の資質を授けられた人物の一人だった」と描いている。この人物像をもとに、トロイルスを中心に物語を再構築すれば以下のものであろう。

トロイアの若い王子、恋には無垢なトロイルスは、クリセイデと呼ばれる若い美貌の未亡人に恋慕する。友人であり、クリセイデの叔父であるパンドルスの強い助力を得て、トロイルスは、自らの愛を何とか打ち明ける。漸く彼の愛が受け入れられる。一方、ギリシャ軍に逃亡していたクリセイデの父は、ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは、クリセイデに、逃げようと懇願するが、クリセイデはこれを受け入れず、10日後には必ず戻ると約束しギリシャの陣営に行くが、これを破ってディオメーデと呼ばれるギリシャ人と暮らすことになる。トロイルスは、失望し、間もなく戦いで命を落とす。

この物語の再構築から次のようなトロイルスのキャラクター、役割などが明らかになる。トロイルスは、恋に落ちた若者の常のように、遠慮がちで、押しの強くない人物であり、ひたすら誠実にクリセイデに仕えようとしたのである。しかし、クリセイデは、その誠実に真剣に対応しようとしなかった。トロイルスの誠実、クリセイデの気まぐれ、不実という構図が明らかになる。

(2) クリセイデ版『トロイルスとクリセイデ』

次いで、クリセイデを中心に物語を再構築すれば次のようになろう。

若い未亡人のクリセイデは、トロイルスという名の若い王子に愛される。トロイルスと叔父パンドルスが結託したしつこい勧めによって、クリセイデは、自らの体面を気にしながらも結局、トロイルスを受け入れる。一方以前にギリシャ側に逃亡していたクリセイデの父は、ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは一緒に逃げることを懇願するが、クリセイデは、必ず戻ってくると約束して、すでに捕虜になっていたトロイアのアンテノールと交換される。ギリシャ陣営に行ってしまうと、クリセイデは、トロイルスのところに戻る気はあるもののそれが無理だと悟り、ディオメーデという名のギリシャ人の求愛を受け入れ、ともに暮らすことになる。結局、トロイルスは、失望し、間もなく戦いで殺される。そして、その後、クリセイデがどうなったか、我々（読者）には分からない。

この物語の再構築から次のようなクリセイデのキャラクター、役割などが明らかになる。すなわち、叔父の執拗な勧めによって、愛を受け入れ、自分とは関係ない捕虜交換によって、その愛は引き裂かれ、戻ってくると約束はしたものの、それが無理と悟り、ディオメーデという名のギリシャ

人の求愛を受け入れざるを得ないことになる。確かに、移り気といわれても、不実と言われても、裏切り者といわれてもやむを得ない面が際立ってくる。

しかし、さらには、自分の意思ではどうにもならない、女の弱い立場ではどうにもならない状況に、あるいは運命に翻弄される姿をも読み取ることができよう。

二人の再構築によって、一方では、誠実な、他方では、不実な、あるいは運命に翻弄されるという対照的なそれぞれの姿を見ることができよう。この物語の最終局面では、誠実な前者は死後天国へ、不実な後者は、行方知れず、となるのである。

II. 典拠、語り手、宮廷風恋愛、運命論

中世英文学を理解するにあたって、特に注意しなければならない中世英文学ならでの事柄がある。その代表的なものを、諸家の説を取りまとめながら確認しておく。

(1) 典拠

チョーサーの、あるいはその時代の文学作品には、今日のいわゆる獨創性を尊ぶものとは異なり、より古い時代の作品、伝説、民話、あるいは歴史的事実などに依拠しながら、それにどのように反応して作品を構成するかという作者の創作態度があった。

『トロイルスとクリセイデ』に関わって、チョーサーが最も依拠したのは、同年代人のイタリアのボッカッチオ（あるいは、ボッカチオ）（Giovanni Boccaccio）の『恋のとりこ』（*Il Filostrato*、Filostrato は、“the man overcome and struck down by love” を意味する。）である。もちろん、ボッカッ

チオも、この作品をより古い作品に依拠しながら生み出している。トロイルスとクリセイデという二人の原型となる恋愛については、12世紀の末頃にフランスのベヌワ・ドゥ・サン・モール (Benoit de Sainte-Maure) がアングロ・ノルマン語で書いた『トロイ物語』 (*Le Roman de Troie*) に依拠し、また、いわゆるトロイの物語に関して普及伝播した知識という点では、13世紀末のイタリアのシシリー人ギドー (Guido delle Colonne) のラテン語散文『トロイ物語』 (*Historia Trojana*) に基づいたと言われている。

チョーサーは、トロイルスとクリセイデ、そしてパンダルスがからむ恋愛物語のあらすじを、ポッカッチオの『恋のとりこ』 (全行で5,704行、八部構成) に依拠している。チョーサーは、『恋のとりこ』の全5,704行から、2,730行を使い、それを2,583行に圧縮して取り入れている。これはチョーサーの全行の約3分の1である。『恋のとりこ』の八部構成もチョーサーでは五部の構成に仕立て直されている。『恋のとりこ』八部の内四部がトロイルスの悶々とした情の叙述に充てられていて、特にクリセイデがトロイアへ出立した後の叙述には、全編の半分ほども割かれている。一方チョーサーは、Book Vの初めにクリセイデのトロイア出立を述べ、全編の5分の3余りは、トロイラスの求愛と愛の歓喜の叙述に当てている。

すなわち、チョーサーでは、トロイルスのクリセイデに対する求愛、愛の歓喜、失恋の悲哀などが等しく描かれていると言える。これは、取りも直さず、チョーサーの関心の所在を明示しているものであろう。

以上が大きな異同であるが、詳しい異同については、ここでは省略する。

(2) 語り手

チョーサーの時代、詩人 (語り手) は、聴衆を前に、読んで聞かせていたのである。チョーサーの聴衆には、高位の貴族やその婦人、高僧など、

上流階の人々がいた。ケンブリッジ大学のコーパス・クリステイ・コレッジにある写本の『トロイルスとクリセイデ』の口絵には、貴族や貴婦人たちが集まった宮廷で、詩を読んでいる風景が色彩豊かに描かれている。この口絵の中心で、読み聞かせているのは、この作品の作家チョーサーで、聴衆の中には、18歳だったリチャード王（1385年当時）、その妻アン王妃も含まれていると言われている。実際、チョーサーは、各 Book の前口上 (prologue)、結び口上、また物語の最中において、聴衆に語りかけている。詩が作者自身によって、口誦される場合、印刷された作品よりも、聴衆の身分や、その時の聴衆の様子を意識したりして、ある程度柔軟に作品を構成する可能性がある、ということである。

Book I の冒頭で「トロイアの王プリアモスの息子トロイルスの二重の sorrow (不幸、悲しみ、)をお話しすることが、私の目的。」と、語り手はこの物語を始める。次いで、語り手は、自らを“God of Loves servantz” (〈愛の神〉の召使たち) に仕えるものとして、恋愛に係わっては、自分は単なる召使、随伴者 (Book I, ll. 15-21) であると控えめな態度で話を進めていく。

また、Book II でも、「ラテン語のものから自国語に直して……原作者の語るままに語るのだから」(Book II, ll. 12-21) と述べ、Book I と同じく、物語の内容とは、深く関わろうとしない、控えめな、あるいは距離を置いた態度で語ることを強調している。

しかしながら、トロイルスとクリセイデの恋が成就することになる Book III では、語り手の態度は一変する。クリセイデの愛の成就を語る力を与えられるように神に強く祈願し、愛の成就に向けて深く関わろうとする (Book III, ll. 43-49) ののである。語り手自身の強い思いが投影されている。

しかし、二人の愛が破局する Book IV の prologue (ll. 43-49) で、語り手は、語るべきことにおののきながらも、クリセイデがトロイルスをどう

して捨てたのか、クリセイデの不実の理由を明かさなければならない、それがこの本の主題であり、その真実を明かすことが自分の役割であると述べるのである。Book II までの少しく距離感を取りながら語る語り手の態度とは全く異なっている。

語り手は、Book I, Book II を語る時、物語る内容とは深く関わろうとしない、控えめな、あるいは距離を置いた態度で語ることを強調している。Book III においては、二人の愛の成就に深く関わろうとする態度になる。そして Book IV 以降では、クリセイデの不実の理由を明かさねばならないとの態度に変化している。

このような変化は、何を意味するのか。これは、正に語り手の、あるいはチョーサーの二人の愛への本格的なコミットメント、すなわち、いったん成就した二人の愛が、なぜ破局したか、その理由を語り手が、すなわちチョーサーが問い詰めようとしているのである。

このような態度の変化は、詩が作者自身によって口誦される場合、印刷された作品よりも、聴衆の身分や、その時の聴衆の様子を意識して、ある程度柔軟に作品を構成する可能性がある、ということに起因している。トロイルスの誠実に対してクリセイデの不実、心変わりを、宮廷の聴衆に語ってきた。そこには女王はじめ、上流の婦人もたくさん聞いている。宮廷風恋愛の作法に則りながら語られる二人の愛が、クリセイデの、すなわち女性の不実だけが語られては、聴衆は収まらない。不実の理由について何らかの回答が必要であったという語り手の姿が伺えるのではないか。

(3) 宮廷風恋愛

いわゆる恋愛を扱っている中世英文学の作品は、この時代特有の愛の作法に則って描かれているのである。すなわち『トロイルスとクリセイデ』

において、トロイア戦争の最中に展開する古代人のトロイルスとクリセイデは、中世の特殊な恋愛作法、当時流行した宮廷風恋愛 (Courtly Love) の作法に則っているのである。

宮廷風恋愛の作法とはいかなるものか。それは、中世時代の創造ではない。ローマの詩人オウィディウス (Ovidius) の『愛の技法』 (*Ars Amatoria*) に遡ると言われている。これは、男性には求愛のテクニークを、女性には誘惑の方法を戯画的に授けるものであった。中世のような封建時代の社会のように、女性の地位が男子への隷属においてのみ存在していた時代、男女の平等の権利を前提として相互の自発的な意思による愛というものとは考えられなかった。このような状況の中、彼が推奨した作法は「意中の婦人に対して、絶対服従で、万難を排して貫く」ことであったが、それが、なぜ十一世紀末の宮廷を遍歴する吟遊詩人の吟唱の中に姿を現すに至ったかは詳らかにはなっていない。ともあれ、この作法が中世の宮廷に行われた中世文学において、しばしば主題として選ばれたのであった。

さらに、この恋愛の作法は、特にアンドレ礼拝堂付き司祭アンドレアス・カペラヌス (Andreas Capellanus) によって、『誠実な愛し方の技術』 (*De Arte Homeste Amandi*) (13世紀初頭?) において集大成され、恋人たちへの手引書として、一般に受け入れられるに至った。道徳的な規範にもとる恋愛関係については、あらゆる時代に存在したかもしれないが、中世時代の上流階級の間では結婚を決める種々の条件があったため、そしてその条件の中に、関係する相手の気持ちがほとんど考慮されなかったため、特に結婚外のいわゆる不倫を促したのであった。宮廷風恋愛はそのようなことをよしとした。

カペラヌスの教義によれば、恋人の求愛を拒絶するための女性側の言い訳として、結婚していることは抗弁にならなかった。事実、夫と妻の間の

愛はありえないと考えられていたので、結婚することが恋人たちの目指す目標ではなかった。また、未亡人は恋人が注目する対象として、既婚の女性と同様望ましいものであった。その教義では真に恋人はどのように振舞うべきか、どのように感情表現すべきかについて、色々規定している。

チョーサーの時代までには、宮廷風恋愛の詳細は単なる文学的伝統様式にすぎなくなってしまったが、トロイルス、クリセイデ、そして彼らの仲介者パンダルスという登場人物の態度と振る舞いは、この恋愛の作法に則ったやり方であり、それに則って愛を演じているのである、ことに注意を払わねばならない。

トロイルスは、宮廷風恋愛の恋人の典型である。戦場では武勇において、ヘクトールに次ぐけれども、恋愛では臆病である。時には自暴自棄になる。パンダルスの強引とも思える導きがなければ、クリセイデに直接自分の心情を吐露することもできない。クリセイデに恋するまでは愛をあざ笑い、恋に落ちた友を愚弄していた。とにかくトロイルスは宮廷風恋愛の作法を体現しているのである。それは、クリセイデと深い関係を持ったにもかかわらず、その後もトロイアの王子である身分にもかかわらず彼女に絶対服従を尽くそうとするところにも表れている。

一方、クリセイデがトロイルスの愛を受け入れることを躊躇する点も、宮廷風恋愛の作法に則っている。この躊躇が、未亡人だからか、外聞を気にするせいか、女性の本能としてそう簡単に愛を受け入れられないと見せようとしたのか、あるいは別の事情によるものかは分からない。ともあれ、クリセイデがトロイルスの抱擁を受け入れたこと、それは宮廷風恋愛の規範では罪悪ではない。

クリセイデの行動を、宮廷風恋愛の規範に照らして見れば、彼女が責められるべきことは、一度誓った愛を不実にもディオメーデのために裏切っ

た点にある、と言えるのではないだろうか。

(4) 運命論

運命論についても、当時の特徴的な考え方があった。その中心にあったのは、ボエシウス (Boethius) の『哲学の慰め』 (*De Consolatione Philosophinae*) で、チョーサーはこれを『ボーエス』 (*Boece*) として、『トロイルスとクリセイデ』と同じ頃か、少し後に中英語の散文に訳している。

さて、トロイルスとクリセイデ二人の幸福な、そして密やかな愛の生活は長くは続かない。クリセイデが、ギリシャ軍の捕虜になっているトロイア軍のアンテノールと交換されることになり、トロイルスの心は打ちひしがれる。パンダルスも駆けつけ、運命の女神を責める (Book IV, ll. 386-392) が、トロイルスは苦悩する。『「生じるべき事はすべて必ずや生じるのだから。こうして滅ぶのも、俺の運命なのだ。」「すべてのものは運命によって生じるのだ。』 (Book IV, ll. 960-966) と語りながら、人間にどれだけ自分の運命を決める自由が残されているのかという点で自問自答することになる。これは、Book IV の 1. 1082 まで、長々と続く。この部分は、ボエシウス (Boethius) の『哲学の慰め』 (*De Consolatione Philosophinae*) (第 5 章 2 以下) を引き写したものである、と言われている。

トロイルスは、この自問自答のなかで、クリセイデとの別れが定められた運命なら、むしろ死なせてくれ、とユーピテル (ジュピター) に祈るのである。つまり、二人の別れは、運命の所為であると述べ、自由意志へのこだわりを取り下げているのである。

ところで、中世紀において運命論だけが優勢であったのではなく、アリストテレス、プラトンなどのギリシャ哲学の信念をひき、キリスト教の洗礼を受けた自由意志説が聖アウグスティヌス、ボエティウスには伝わって

いた。ポエティウスは、人間の自由意志と神の予知との対立を調節しようとして、現世の幸福は空虚にして真の幸福は徳と善行のうちにあることを唱え、神に似た人間がその判断の利器である理性を極度に働かせ、地上的なものから逃避することなく、これと果敢に戦ってこそ始めて神に参与し得ると、主張していた。

しかし、チョーサーは、自由意志論は採用せずに悲観的な運命論だけを、トロイルスに言わしめている。チョーサーは、トロイルスの自問自答の独白の中で、二人の別離は「運命」の所為と言わしめているのである。

III. 笑い (Cosmic Laugh)

典拠、特に『恋のとりこ』との比較によって、語り手、すなわちチョーサーは、トロイルスの求愛と愛の歓喜を強調して語っていたことが分かった [II. (1)]。また聴衆を前にした語り手の語り口は、二人の恋愛模様について、最初は、控えめな態度であったが、途中から二人の別れの原因をしっかりと突き止めなければならいと真剣な態度に変化した [II. (2)]。二人の愛は、宮廷風恋愛の規範に則っていたのだが、その規範から外れたのはクリセイデのディオメーデへの心変わりであった [II. (3)]。トロイルスは二人の別れの原因は運命の所為であると、自らを納得させている [II. (4)]。以上が、前章 II において明らかになったことである。

さて、愛する二人は生き別れ、約束の 10 日を過ぎてもクリセイデは戻らない。そうしているうちにトロイルスは、兄のデイフェーブスが敵将ディオメーデから奪った陣羽織に、別れの日に自分がクリセイデに与えたブローチが附いているのを見つける。クリセイデの裏切りの証を見た彼は絶望し、戦場に死を求めて戦い続ける。ディオメーデに報復の一矢を報いどころか、遂に敵将アキレウスの手にかかって、その若い命は果てる。そ

して、死後、トロイルスの魂は昇天し、第八天にまで上り、星や天界の音楽に囲まれて、極めて小さい一点の地球を見下す。今や世間を離れ天上の至福に達し、自分の死を悼んでいる人々が泣き悲しんでいるのを見て笑う (cosmic laugh) ののである (Book V, ll. 1807-1827)。

この「笑い」とは、この物語にとって一体どんな意味があるのか。これが、この作品の解釈に当たっての最大の問題である。

ところで、この Book V, ll. 1807-1827 の 3 連の部分は、ボッカッチオの別の作品『イル・テセイダ』 (*Il Teseida delle nozze d'Emelia* 《*The Story of Theseus Concerning the Nuptials of Emily*》, 『テセウス一族の物語』) の第十一章一節から三節に対応していて、Teseida lines と呼ばれているが、チョーサーはほとんど、この『イル・テセイダ』に依拠している。先に述べたように、ボッカッチオの『恋のとりこ』やボエシウス (Boethius) の『哲学の慰め』を典拠としていたように、チョーサーは、ここでは『イル・テセイダ』に依拠しているが、ここでの典拠との相違は、『イル・テセイダ』の主人公アーサイトの笑いが、トロイルスの「笑」いに置き換えられたところのみのものである。

ところで、前章 I の (1) で、トロイルスを物語の中心に据えて、物語を再構築したが、そこでは次のような物語が成立した。

「トロイアの若い王子、恋には無垢なトロイルスは、クリセイデと呼ばれる若い美貌の未亡人に恋慕する。友人であり、クリセイデの叔父であるパンダルス強い助力を得て、トロイルスは、自らの愛を何とか打ち明ける。漸く彼の愛が受け入れられる。一方、ギリシャ軍に逃亡していたクリセイデの父は、ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは、クリセイデに、逃げようと懇願するが、クリセイデはこれを受け入れ

ず、10 日後には必ず戻るからと約束しギリシャの陣営に行くがこれを破って、ディオメーデと呼ばれるギリシャ人と暮らすことになる。トロイルスは、失望し、間もなく戦いで命を落とす。』

このような物語の最後に、トロイルスの「笑い」を置いてみると、次のようになろう。トロイルスは、恋に落ちた若者の常のように、遠慮がちで、押しの強くない人物であり、ひたすら誠実にそして、宮廷風恋愛の作法に従い、クリセイダを至上の人として仕えようとした [cf. II. (1)]。しかし、クリセイデは、その誠実に真剣に対応しようとしなかった。一度誓った愛を不実にもディオメーデのために裏切った [cf. II. (3)]。クリセイデの気まぐれ、不実ののちに誠実なトロイルスは落命する。そして魂は昇天し、天上から『……最後に自分の殺されたところを見下した。／彼は自分の死に大声をあげて泣く人々の／悲しみを見て即座に笑』ったのである。そして『……心をすべて天に向けるべき時に、／永続しない盲目的欲望を／必死に追い求めるわれらの一切の行動を責めて……』、第八天のさらに彼方にあるメリクリウスが彼に割り当てた住処へと旅立った』のである。つまり、ここでの『笑い』は、誠実に、クリセイダに全身全霊をもって仕えた自分に対し、現世における若さの失敗、恋人にそむかれた身の不甲斐なさを、運命論ですべてを運命の所為にした [cf. II. (4)] にも関わらず、さらなる不幸（クリセイデがディオメーデの愛を受け入れて裏切ったこと。）に見舞われた、という自嘲する自己批判の皮肉な笑い、と理解されようか。

あるいは、次のように解釈されようか。すなわち、誠実に己の愛を全うしながらも、現世における若さの失敗、恋人にそむかれた身の不甲斐なさを、すべて運命の所為にしたのにも関わらず、さらなる不幸が見舞った。とはいえ、自分の魂は天上に向かった。天上の至福との対比において、世俗的幸福の一切は偽りである。徳、最高善、神を真の幸福と説く『ポーエ

ス』の境地へと到達した。そして、『ボーエス』の哲学からキリスト教の不変の愛へと向かった。大声をあげて泣く人々を見て、いずれ、キリスト教の不変の愛へと向かうという、過去の何物にも煩わされない、こだわりを乗り越えて笑ったのである。

また、クリセイデ版『トロイルスとクリセイデ』では次のような物語が再構築された。

「若い未亡人のクリセイデは、トロイルスという名の若い王子に愛される。トロイルスと叔父パンドルスが結託したしつこい勧めによって、クリセイデは、自らの体面を気にしながら結局、トロイルスを恋人として受け入れる。一方以前にギリシャ側に逃亡していたクリセイデの父は、ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは一緒に逃げることを懇願するが、クリセイデは、必ず戻ってくると約束して、すでに捕虜になっていたトロイアのアンテノールと交換される。ギリシャ陣営に行ってしまうと、クリセイデは、トロイルスのところに戻る気はあるもののそれが無理だと悟り、ディオメーデという名のギリシャ人の求愛を受け入れ、ともに暮らすことになる。結局、トロイルスは、失望し、間もなく戦いで殺される。そして、その後、クリセイデがどうなったか、我々（読者）には分からない。」

このような物語の後に、トロイルスの「笑い」を置いてみると次のようになろうか。叔父のしつこい勧めによって、愛を受け入れ [cf. II. (1)], 自分とは関係ない捕虜交換によって、引き裂かれ、戻ってくると約束はしたものの、それが無理と悟り、ディオメーデという名のギリシャ人の求愛を受け入れざるを得ないことになったクリセイデ [cf. II. (3)]。トロイルスは、失望し [cf. II. (4)], 間もなく戦いで殺される。クリセイデにとっ

ては、如何ともし難い、万やむを得ない成り行きである。しかしながら、トロイルスの魂は昇天し、天上から『……最後に自分の殺されたところを見下した。／彼は自分の死に大声をあげて泣く人々』の中にクリセイデの姿も見たのかもしれない。そして、……悲しみを見て……笑』ったのである。不実な、如何ともし難い、万やむを得ない成り行きに身を任せたクリセイデは、多分この地上で大声をあげて泣く人々の中にいるのだ。それ見たことかとトロイルスは非難を込めてクリセイデを笑った、と解釈できようか。

あるいは、魂が天上に昇ることによって、すなわち、肉体の枠を離れることによって、苦しみが失せた。霊的な明視力を得たトロイルスの魂はここにおいて、事態の本質をつかんだ。クリセイデの裏切りを必然的に導いた彼女の弱い性格、その複雑（ある意味、浅薄）な心情をはじめて悟ったのである。それは女性の持つ本質でもある。そのような性格に振り回されて苦しんだ自分自身の浅薄さを笑った、と解釈できようか。

結 束 に

トロイルス版とクリセイデ版のそれぞれの物語をもとにして、「笑い」の意味の解釈を示してみたが、最後に、この二つをまとめた解釈を示さなければならないであろう。

語り手としてのチョーサーは、この物語を語るにあたって、最初はある種控えめに、しかし、クリセイデがトロイルスを捨てる段になってからは、その原因も探りたい、と語りの態度を一変させる [II. (2)]。その原因を語り手は、クリセイデの眉がくっついている (“……hire browes joynedenyfeefe”, Book V, l. 813) ためとか、クリセイデの、あるいは広い意味では女のもつ優柔不断の性格 (“……slydyng of corage”, Book V, l. 825) のため、

主人公で読む G. チョーサー 『トロイルスとクリセイデ』

などとも言ってはいるが、それが真の原因の答ではない。語り手は、誠実なトロイルスが不実なクリセイデに対し天上からから浴びせた「笑い」によって、二人の間に均衡を取った。二人に対し種々の思いを持つ貴紳淑女の聴衆に対する配慮があったのかもしれない。取り敢えず均衡を保った上で、Chaucer は、「笑い」の意味を、あるいは二人の別れの最終的原因追及を、聴衆に、あるいは読者に委ねたとは考えられないだろうか。

本講座では、『トロイルスとクリセイデ』の解釈上の最大の問題について、あえてトロイルス版とクリセイデ版とに物語を再構築しながら、諸家の見解を踏まえていくつかの解釈の例示を試みたが、本日の聴衆の皆様への解釈の参考になれば幸いである。

参 考 文 献

テキスト

L. D. Benson, *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. Oxford: Oxford Univ. press, 1987

R. K. Gordon, *The Story of Troilus*, Toronto: Univ. of Toronto Press, 1978

以下については、日本語の文献・翻訳のみを上げておく。一つ一つ明示しなかったが、日本語訳を含めこれらの文献からも、直接、間接の引用などもしたので、感謝を込めてあげておく。

[翻訳]

刈田元司譯『G. チョーサー 戀のとりこ』 東京: 新月社, 昭和 23 年

宮田武志譯『ジェフリー・チョーサー トゥローイラスとクリセイデ』 西宮: 大手前女子学園アングロノルマン研究所, 昭和 54 年

宮田武志譯『ジェフリー・チョーサー 善女よもやま話』 西宮: 大手前女子学園アングロノルマン研究所, 昭和 57 年

笹本長敬訳『トロイルスとクリセイデ 付・アネリダとアルシーテ』 東京: 英宝社, 2012 年

アンドレアス・カベルラヌス著 野島 秀勝訳『宮廷風恋愛の技術』(叢書・ユニベルシタス 297) 東京: 法政大学出版局, 1990

アンドレーアス・カベルラヌス 瀬谷幸男訳『宮廷風恋愛について ヨーロッパ中世の恋愛指南書』 東京: 南雲堂, 1993

ボエティウス 渡辺義雄訳『哲学の慰め』(筑摩叢書 139) 東京: 筑摩書房, 1969

主人公で読む G. チョーサー 『トロイルスとクリセイデ』

ボエティウス 畠中尚志訳 『ボエティウス・哲学の慰め』 東京：岩波書店，1938
[研究書]

上野直蔵 *The Religious View of Chaucer in his Italian Period*, 東京：南雲堂，1959

上野直蔵 『チョーサーの「トロイラス」論』 東京：南雲堂，1972

榊井勉夫 『チョーサー研究』 東京：研究社 昭和 37 年

吉田新吾 『チョーサー研究』 京都：アポロン社，昭和 39 年

繁尾 久 『中世英文学点描』 東京：伸光社，1982

繁尾 久他 『チョーサーとキリスト教』 東京：学書房，昭和 59 年

主人公は誰だ?: 『オセロ』 を読む

福 士 航

【要旨】

本公開講義では、『オセロ』における主人公は誰かを考察することを目的とした。このような問題設定をした背景を第1節では紹介した。『オセロ』は台詞を定量的に考察すると、極めて例外的なことに、タイトル・キャラクター（通常は「主人公」）であるオセロの台詞が、イアーゴよりも少ない。通常は主人公がもっとも台詞量が多いものだが、この芝居では悪役のイアーゴのほうがオセロよりも2,000語近く台詞量が多いのである。第2節では、とはいえ、悲劇の主人公という観点から見ると、高位の人間の運命の変転という、アリストテレス以来の悲劇の主人公に該当するのはオセロ以外にないことを確認した。第3節では、『オセロ』の批評史を簡単に振り返った。ヨーロッパ白人にとっての人種的他者が主人公となることへの抵抗感がRhymerの批評からは垣間見える。また、Coleridgeの劇評には、高位の人間が嫉妬という愚劣な感情に動かされることへの反感・忌避感が見て取れる。これらの意見の背後に見えてくるのは、ヨーロッパ白人中心主義的かつ理性中心主義的態度である。この劇の真の主人公が誰かを考えると、ある種の恐怖—白人が非白人に優越などしておらず、実は同様に非理性的な側面を持つと露呈してしまうことへの恐怖—がこれらの意見から透けて見えることが分かる。第4節では、この劇の主題は、非白人のオセロも、ヨーロッパ白人のイアーゴも、ともに嫉妬という感情—「緑色の目をした怪物」—に支配されていることにあることを指摘した。末廣論文にあるように、西洋対イスラムという二項対立の図式に陥らずにこの劇

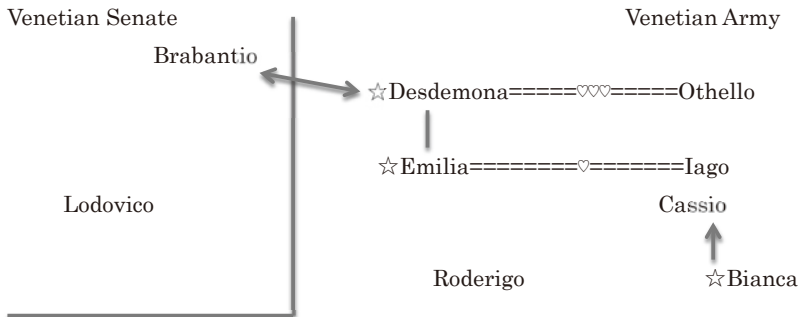
主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

を読むことが、ポピュリズムの嵐が吹く現在には肝要である。進化心理学の知見では、嫉妬は種としての人類に普遍的に備わる情念であるらしい。西洋対イスラムという単純な二項対立を打破する読みを提示するという政治的目的のためには、そうした知見も役立てられるだろう。「緑色の目をした怪物」たる嫉妬こそが、この劇の真の主人公であると、最終的には論じた。

【資料】

- ・本日の講義の流れ
0. 登場人物関係図
 1. 主人公は誰だ? 定量的に
 2. 悲劇の主人公は誰だ?
 3. *Othello* はどう読まれてきたか
 4. 本当の主人公は……

0. 登場人物関係図 *Othello, or the Moor of Venice*



1. 主人公は誰だ? 定量的に

Marvin Spevack, *A Complete and Systematic Concordance to the Works of Shakespeare*. Vol. 3 (Georg Olms : Hildesheim, 1698)

- *Macbeth* : 2,349 lines ; 16,436 words
 - Lady Macbeth : 257 lines ; 1,901 words
 - 10.940 % of lines ; 11.566 % of words
 - Macbeth : 705 lines ; 5,291 words
 - 30.012 % of lines ; 32.191 % of words
- *Hamlet* : 4,042 lines ; 29,551 words
 - Claudius : 550 lines ; 4,081 words
 - 13.607 % of lines ; 13.810 % of words
 - Hamlet : 1,507 lines ; 11,563 words
 - 37.283 % of lines ; 39.128 % of words
- *King Lear* : 3,487 lines ; 25,221 words
 - Edgar : 401 lines ; 2,882 words
 - 11.499 % of lines ; 11.426 % of words
 - Lear : 753 lines ; 5,592 words
 - 21.594 % of lines ; 25.171 % of words
- *Othello* : 3,551 lines ; 25,887 words
 - Desdemona 391 lines ; 2,760 words
 - 11.010 % of lines ; 10.661 % of words
 - Iago : 1,094 lines ; 8,434 words
 - 30.808 % of lines ; 32.580 % of words
 - Othello : 879 lines ; 6,237 words

— 24.753 % of lines ; 24.093 % of words

2. 悲劇の主人公は誰だ?

2-1. Iago?

IAGO. Mere prattle, without practice

Is all his soldiership — but he, sir, had the election

And I, of whom his eyes had seen the proof

At Rhodes, at Cyprus and on other grounds

Christian and heathen, must be be-lead and calmed

By debtor and creditor : This counter-caster

He, in good time, must his lieutenant be

And I, God bless the mark, his Moorship's ancient! (1.1.25-32)

口じゃペラペラ実力はへなへな、それがやっこさんの軍人魂のありったけだ — なのにそいつが選ばれ、この俺は、ロードス島でもキプロス島でも、いや キリスト教国、異教国を問わず、いたるところで手柄を上げ 將軍の目にとまったこの俺が、筆記専門のそろばん野郎の

風下におとなしく引っ込んでなきやならん。あの会計係が まんまと副官におさまって、この俺は、情けないじゃないか、黒い將軍閣下の旗持ちだ。

(松岡和子訳: 以下『オセロ』の訳は同様に松岡訳)

IAGO. I hate the Moor

And it is thought abroad that 'twixt my sheets

He's done my office. I know not if't be true,

Yet I, for mere suspicion in that kind,

Will do as if for surety. (1.3.385-89)

俺はムーアが憎い、世間の噂じゃ、やつが俺の寢床にもぐりこみ

俺のかわりを務めたそうだ。本当かどうかは知らないが、この手のことで疑いがあれば、

主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

確かな事実で通すのが俺の流儀だ。

2-2. Desdemona?

EMILIA. I will be hanged if some eternal villain

Some busy and insinuating rogue,

Some cogging, cozening slave, to get some office,

Have not devised this slander, I'll be hanged else!

IAGO. Fie, there is no such man, it is impossible.

DESDEMONA. If any such there be, heaven pardon him. (4.2.132-37)

エミリア 首くられたっていい、きっとどこかの底なしの悪党が、
おせっかいなおべんちゃら野郎が、
嘘にまみれたベテン師が、いい地位にありつこうとして
こんな中傷をでっちあげたに決まってる。違ったら首をあげる！
イアゴー 馬鹿、そんな男がいるもんか、いるわけない。
デズデモーナ いるとしても、天がお許しになりますよう。

DESDEMONA. A guiltless death I die.

EMILIA. O, who hath done

This deed?

DESDEMONA. Nobody. I myself. Farewell.

Commend me to my kind lord — O, farewell! (5.2.121-23)

デズデモーナ 無実の罪で、私、死ぬの。
エミリア ああ、誰です、こんなことを？
デズデモーナ 誰でもない。私が自分で。さようなら。
私の優しい夫によろしく — ああ、さようなら。

主人公は誰だ?: 『オセロ』を読む

2-3. Othello?

OTHELLO. And say besides that in Aleppo once,
Where a malignant and a turband Turk
Beat a Venetian and traduced the state,
I took by th' throat the circumcised dog
And smote him — thus!

He stabs himself. (5.2.350-54)

それに加え、こうも申し上げる、かつてアレppoの街で、ターバンを巻いたトルコ人が、敵意をむき出しにして一人のヴェニス人に殴りかかり、国を侮辱するのを見た私は、その犬畜生の喉を引っ掴み、こうして一打ちのめしたと！（自らを刺す）



(The 1600 portrait of Al-Annuri, Moroccan ambassador to England)

3. Othello はどう読まれてきたか

Thomas Rhymer, *A Short View of Tragedy*. (1693)

First, this may be a caution to all maidens of quality how, without their parents'

consent, they run away with blackmoors. (cited in *Othello*. Second Norton Critical Edition, 228)

S.T. Coleridge, 'Marginalia on *Othello*' (1819)

Finally, let me repeat that Othello does not kill Desdemona in jealousy, but in a conviction forced upon him by the almost superhuman art of Iago, such a conviction as any man would and must have entertained who had believed Iago's honesty as Othello did. ...Othello had no life but in Desdemona: — the belief that she, his angel, had fallen from the heaven of her native innocence, wrought a civil war in his heart. She is his counterpart; and, like him, is almost sanctified in our eyes by her absolute unsuspectingness, and holy entireness of love. As the curtain drops, which do we pity the most? (cited in *Othello*. Second Norton Critical Edition, 258)

末廣幹「イスラム恐怖を超えて — 『オセロー』とトルコ化の不安のレトリック」(2002)

再び現代における『オセロー』の読解の問題点に戻ることにしよう。すでに指摘したように、現代『オセロー』の人種主義の言説を分析する際に注意しなければならないのは、キリスト教国とイスラム勢力との二元論的な対立、言い換えれば、「文明の衝突」というパラダイムを前提にしないことである。このような二元論は、十字軍の遠征以来、歴史的に連綿と継承されてきたかのように誤解されているが、実際には、二十世紀になって欧米におけるエリート・カルチャーから大衆文化を通じてオリエンタリズムが再び強化されたときに、その時々^々の政治的、社会的状況に応じて捏造されたものにすぎない。この二元論の産物の最たるものが、イスラム教徒はジハードを通じて世界征服を目論む悪魔の使徒であるかのようにみなす^{イスラモフォビア}イスラム恐怖の言説であることは言うまでもない。本論では、こうした二元論やイスラム恐怖の言説はひとまず捨象して、歴史的な偶発性 — 具体的には、エリザベス朝からジェームズ朝にかけての対イスラム外交政策の変化 — を念頭に置きながら、トルコ化の不安が改宗ムーア人であるオセローに投影され

主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

るプロセスを追った。それでは、現在『オセロー』の上演を見る観客やその読者である我々はどのような歴史的な偶発性の下にあるのだろうか。はたして、我々は、イスラム恐怖の言説から自由になれるのだろうか。自刃するオセローが演じてみせるさまざまな人種のパフォーマンスはまさにそうした問題を我々に投げかけているのだ。(133)

4. 本当の主人公は……

デイヴィッド・M・バス『一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 — 嫉妬と性行動の進化論』(2001年 [原著の出版は2000年])

時間の流れのどの時点で切ってみても、生物は、何十万年も何百万年ものあいだ繰り返し行われてきた、この淘汰による進化の営みによって作りだされた形質の集合体であると考えることができる。現代の人間はみな生存と繁殖という仕事に成功した祖先たちの文字どおり途切れることのない長い系列につながっている。彼らの子孫であるわれわれは、彼らを成功に導いた形質を受け継いでいる。これらの形質が適応と呼ばれるものである。(45-6)

嫉妬は、この理論によれば、ひとつの適応なのである。適応とは、進化心理学の用語では、繰り返し起こる生存や繁殖上の問題に対処するために進化した解決策のことである。(14-15)

嫉妬による暴力は北アメリカや、西欧文化や、メディアによるイメージに毒された文化にのみ存在するものではない。ティウイ族 [※オーストラリアの少数民族] にも、ヤノマミ族 [※南米アマゾンの少数民族] にも伝記はなく、ましてテレビなどであろうはずがない。アメリカ文化にしか通用しない説明や、慣習や社会化、西欧の家父長制に根拠を求める説では嫉妬の暴力の世界的な広がりを説明することはできない。(159)

アントニオ・R・ダマシオ『感じる脳 — 情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』(2005年 [原著の出版は2003年])

感情が^{マインド}心と^{ボディ}身体に生じるとき、それは人間的喜びの、あるいは人間的苦悩の表出であるということ。感情は情動につけ加えられた単なる装飾ではない。もつのも自由、捨てるのも自由、といったものではない。(25)

IAGO.

For that I do suspect the lusty Moor

Hath leaped into my seat, the thought whereof

Doth like a poisonous mineral gnaw my inwards...

And nothing can or shall content my soul

Till I am evened with him, wife for wife...

Or, failing so, yet that I put the Moor

At least into a jealousy so strong

That judgement cannot cure ; (2.1. 293-300)

なにしろあの助平なムーアときたら俺の馬の鞍にまたがったことがあるらしい、それを
思うと猛毒ではらわたをかきむしられるようだ……腹の虫をおさめる道はただひとつ、
女房には女房、やつと五分五分になるしかない……そいつがうまくいなくても、せめて
あのムーアを激しい嫉妬に取り憑かせてやる、思慮分別では手の施しようがないくら
いにな。

EMILIA. The Moor's abused by some most villainous knave,

Some base notorious knave, some scurvy fellow.

O heaven, that such companions thou'dst unfold,

And put in every honest hand a whip

To lash the rascals naked through the world

Even from the east to th' west.

IAGO. Speak within door.

EMILIA. Oh, fie upon them! Some such squire he was

That turned your wit the seamy side without

And made you to suspect me with the Moor.

IAGO. You are a fool, go to. (4.2.141-50)

主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

エミリア ムーア様は、どこかの札付きの悪党に騙されてるんだ、下劣な名うての悪党に、クズみたいな下司下郎に。ああ、神様、そいつの化けの皮を引っぺがし、正直者ひとりひとりに鞭を持たせて裸にむいたごろつきを叩きのめし、世界じゅう東の果てから西の果てまで追いまくらせて下さい。

イアゴー 外に聞こえるぞ。

エミリア ああ、くやしい！ きっとそういうやつだったのよ、あんたの分別を裏返しにして私がムーア様とあやしいなんて思い込ませたのも。

イアゴー 馬鹿、いい加減にしろ。

IAGO. O beware, my lord, of jealousy!

It is the green-eyed monster, which doth mock

The meat it feeds on. That cuckold lives in bliss

Who certain of his fate loves not his wronger,

But O, what damned minutes tells he o'er

Who dotes yet doubts, suspects, yet strongly loves! (3.3.167-72)

ああ、用心なさい、將軍、嫉妬というやつに。こいつは緑色の目をした化け物だ、餌食にする肉をもてあそぶ。女房を寝取られても幸せに生きていけるのは、それが定めと思
い決め、不倫した女房など愛さない男です。しかし、ああ、惚れ抜きながら疑い、あやし
しみつつ熱愛している男には一分一分が地獄の苦しみでしょうね！

OTHELLO. Fetch me the handkerchief, my mind misgives.

DESDEMONA. Come, come,

You'll never meet a more sufficient man.

OTHELLO. The handkerchief!

DESDEMONA. I pray, talk me of Cassio.

OTHELLO. The handkerchief! (3.4.91-98)

オセロー あのハンカチを持って来い、心配なのだ。

デズデモーナ ね、いいでしょう、あんなに有能な人はもう出てこないわ。

オセロー ハンカチだ！

主人公は誰だ?: 『オセロ』を読む

デズデモーナ お問い合わせ, キャシオーのことを。

オセロー ハンカチだ!

Works Consulted

Shakespeare, William. *Othello*. The Arden Shakespeare. 3rd edition. Ed. E. A. J. Honigmann. Surrey: Thomas Neslon & Sons, 1997.

———. *Othello*. Second Norton Critical Edition. Ed. Edward Peacher. New York: W.W. Norton, 2004)

『オセロー』 松岡和子訳 (ちくま文庫, 2006年)

ダマシオ, アンтониオ・R 『感じる脳—情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』
田中三彦訳 (ダイヤモンド社, 2005年)

バス, デヴィッド・M 『一度なら許してしまう女 一度でも許せない男—嫉妬と性行動の進化論』三浦彊子訳 (PHP 研究所, 2001年)

エリザベス・ベネットの新しさ

——『高慢と偏見』から読み取るイギリス社会の変化

向井秀忠

Jane Austen が描く世界は、姪 Anna に当てた手紙の中で使った言葉 “Three or four families in a country village is the very thing to work on.” (1914年9月9日付) がしばしば引用され、広い世界の事情には疎く、持ち前の観察力で微妙な人間関係を細かに描き出したものと、今でも紹介されることが多い。確かに、彼女の作品はどれもアッパー・ミドルの家庭や社交界を舞台に、そこで繰り広げられる恋愛と結婚の物語を中心に進められるものであるから、そのような理解もあながち誤ったものであるとは言えない。

しかしながら、彼女の作品を丁寧に読み解いていくと、日常レベルを超えたもっと大きな世界へと開かれていることがわかってくる。1813年に出版された *Pride and Prejudice*¹ もその例外ではなく、例えば、ヒロインの Elizabeth Bennet が Fitzwilliam Darcy や Lady Catherine de Bourgh などと交わす会話を通して、当時のヨーロッパを席卷していた啓蒙思想とのつながりを見出すことができる。

今回は、まず、Austen が執筆活動をした摂政期の後にくる Victoria 時代における評価を確認することで、彼女の作品の特徴について考えてみたい。

1 テキストには次のものを使用した。Jane Austen, *Pride and Prejudice*, The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen, Pat Rogers, ed. (Cambridge UP, 2013).

次に、Mr. Darcy の最初の求婚の場面および Lady Catherine と対峙する場面における Elizabeth の反応を通して、時代による「ジェントルマン」像の移り変わりを読み解いていきたい。そして、その移り変わりの背景には、ヨーロッパ啓蒙思想の影響があり、そこにこそこの作品の主人公の「新しさ」があることを探っていく。

1. Victoria 時代の Austen

小説家としての Austen の評価は、これまで一貫して高かった訳ではなく、時代の嗜好性によって浮沈があったというのも当然である。例えば、彼女の姪の Fanny Knight は二人の叔母について次のように言っていたという。

[Jane] was not so refined as she ought to have been from her talent . . . They [the Austens] were not rich & the people around with whom they chiefly mixed, were not all high bred, or in short anything more than mediocre & they of course tho' superior in mental powers and cultivation were on the same level as far as refinement goes . . . Aunt Jane was too clever not to put aside all possible signs of "common-ness (if such an expression is allowable) & teach herself to be more refined . . . Both the Aunts [Cassandra and Jane] were brought up in the most complete ignorance of the World & its ways (I mean as to fashion &c) & if it had not been for Papa's marriage which brought them into Kent . . . they would have been, tho' not less clever & agreeable in themselves, very much below par as to good Society & its ways.²

これは、70歳を超えた Fanny が亡くなった叔母たちについて思い出しながら妹に宛てた手紙の中にある言葉であるが、Austen が“almost another sister”（1808年10月7-8日付の手紙）と書き記すほど可愛がって

2 Claire Tomalin, *Jane Austen : A Life* (Knopf, 1997) pp. 134-35.

いたという姪の鼻持ちならない恩知らずなものとして Austen 愛好家からは評判が悪い。しかしながら、そのように Fanny 個人の人間性に帰すべきものではなく、むしろ時代や階級の嗜好性の相違や変化を読み取ることができる好例と理解するほうが公平であろう。Fanny は、叔母が執筆活動を行った摂政期ではなく、その後の Victoria 時代を生き、また、教区司祭の娘であった叔母と異なり、地主の娘として生まれ育ったことを考えれば、自分を可愛がってくれた叔母について、このような違和感を覚えたとしても不思議ではない。

この Fanny の感覚、つまり次世代の Victoria 時代の読者たちの立場で、例えば、*Pride and Prejudice* の次の場面を読んでみるとどうなるだろうか。

In Meryton they parted ; the two youngest repaired to the lodgings of one of the officers' wives, and ①Elizabeth continued her walk alone, crossing field after field at a quick pace, jumping over stiles and springing over puddles with impatient activity, and finding herself at last within view of the house, ②with weary ankles, dirty stockings, and a face glowing with the warmth of exercise.

She was shown into the breakfast-parlour, where all but Jane were assembled, and ③where her appearance created a great deal of surprise. That she should have walked three miles so early in the day, in such dirty weather, and by herself, was almost incredible to Mrs. Hurst and Miss Bingley ; and Elizabeth was convinced that they held her in contempt for it. She was received, however, very politely by them ; and in their brother's manners there was something better than politeness ; there was good humour and kindness. Mr. Darcy said very little, and Mr. Hurst nothing at all. ④The former was divided between admiration of the brilliancy which exercise had given to her complexion, and doubt as to the occasion's justifying her coming so far alone. The latter was thinking only of his breakfast. (Ch. 7. 下線筆者)

これは、主人公の Elizabeth が、風邪で寝込んでしまった姉 Jane を心配のあまりに見舞う場面であり、現代の読者には、彼女の姉を思い遣る強さ

が感じられるだけであろう。ところが、そんな Elizabeth の行動は、下線部③にある通り、その場にいた人たちにとっては「とても信じられないもの」と映っているのである。その理由は、おそらく下線部①や下線部②にある様子、つまり、アッパー・ミドルの階級の若い娘が、付き添いもなく、長い距離を歩いてくる、しかも雨上がりだったために泥だらけになりながら、というのが当時の「マナー」に反していたからである。Elizabeth が「マナー」を逸脱しているのであれば、Bingley 姉妹たちの反応も不当に的はずれなものではない。さらに道徳的に厳しくなる Victoria 時代の読者にとっても、この個所は、加えて、「脚」にかかわる“ankles”という言葉がそのまま使われているだけではなく、“a face glowing with the warmth of exercise”と女性キャラクターの肉体性を感じさせるような描写もあり、それらが作者が洗練されていない印象を与えていたのかもしれない。事実、Austen の小説は、この時代には一時的に人気落ちてしまったとされている。

ここで注目したいのは、下線部④にある Mr. Darcy の反応である。人がいい Mr. Bingley は Elizabeth を温かく迎え（「人がいい」と言うより、新興の地主であるため、この階級の「マナー」をまだ十分に理解していないことの証左とも理解できる）、俗物的な Bingley 姉妹が見下すような感じにある中で、Mr. Darcy は Elizabeth の火照った顔色の魅力と彼女の「マナー」の逸脱ぶりとは相反する感じを抱いている。しかしながら、運動によって赤く火照った顔色に敢えて魅力を感じる Mr. Darcy の感性には、この場にいる他の人たちとは異なった、時代の制約にだけ縛られることがない「新しさ」があることは間違いないだろう。この点が、これから論じる *Pride and Prejudice* という作品が持ち得た「新しさ」へとつながっていくのである。

2. Mr. Darcy の求婚, Elizabeth の拒絶

主人公の Elizabeth を含め、作品の登場人物たちのほとんどは Mr. Darcy が彼女に求婚したことに驚く（ただし、Elizabeth の親友 Charlotte Lucas だけが例外で、彼女は最初から Mr. Darcy の Elizabeth に対する強い関心について指摘しており、その慧眼ぶりを示している）。そんな Mr. Darcy の 1 回目の求婚の言葉は次のようなものであった。

“And this,” cried Darcy, as he walked with quick steps across the room, “is your opinion of me! This is the estimation in which you hold me! I thank you for explaining it so fully. My faults, according to this calculation, are heavy indeed! But perhaps,” added he, stopping in his walk, and turning towards her, “these offenses might have been overlooked, had not your pride been hurt by my honest confession of the scruples that had long prevented my forming any serious design. These bitter accusations might have been suppressed, had I, with greater policy, concealed my struggles, and flattered you into the belief of my being impelled by unqualified, unalloyed inclination ; by reason, by reflection, by everything. But disguise of every sort is my abhorrence. Nor am I ashamed of the feelings I related. They were natural and just. Could you expect me to rejoice in the inferiority of your connections? — to congratulate myself on the hope of relations, whose condition in life is so decidedly beneath my own?” (Ch. 34)

求婚される側にすれば、これは自分の親族関係を貶めるとんでもない言葉であり、当然のごとく、Elizabeth も頭にきて、求婚を受け入れるどころではなく、はっきりと拒絶をする。それだけではなく、次のように付け加えた。

Elizabeth felt herself growing more angry every moment ; yet she tried

to the utmost to speak with composure when she said :

“You are mistaken, Mr. Darcy, if you suppose that the mode of your declaration affected me in any other way, than as it spared me the concern which I might have felt in refusing you, had you behaved in a more gentlemanlike manner.” (Ch. 34, 下線筆者)

Bennet 家の年収、親戚関係、そして家族の立ち居振る舞いの品のなさなどを考えると、よもや自分からの求婚が拒絶されることなどないだろうと考えていた Mr. Darcy にとって、Elizabeth の断固とした拒否の態度は心外であっただろう。しかしながら、それ以上にショックだったのは、上記の下線部分の言葉であった。後に、彼は次のように語っている。

“I cannot be so easily reconciled to myself. The recollection of what I then said, of my conduct, my manners, my expressions during the whole of it, is now, and has been many months, inexpressibly painful to me. Your reproof, so well applied, I shall never forget : ‘had you behaved in a more gentlemanlike manner.’ Those were your words. You know not, you can scarcely conceive, how they have tortured me ; — though it was some time, I confess, before I was reasonable enough to allow their justice.” (Ch. 58, 下線筆者)

「もっとジェントルマンらしく振る舞ってくださっていたら」という Elizabeth の言葉は、「ジェントルマンらしく振る舞う」ことを心がけていたというよりも、おそらくは自分が「ジェントルマンらしくない」などと考えたことさえなかったはずの彼にとって、まさに人生観をくつがえすような強いものであったことは推察できる。そうでなければ、和解した Elizabeth にそのことをわざわざ言わないであろう。

では、Elizabeth から見て、Mr. Darcy のどこが「ジェントルマンらしくない」ように思えたのだろうか。Mr. Darcy の伯母 Lady Catherine de Bourgh は、自分の甥が Elizabeth と結婚するのではないかと危惧を抱く。

そのため、礼儀も顧みず、突然、Bennet 家にやって来て、二人の結婚を思いとどまらせようと次のように Elizabeth を牽制する。

“I will not be interrupted. Hear me in silence. My daughter and my nephew are formed for each other. They are descended, on the maternal side, from the same noble line; and, on the father’s, from respectable, honourable, and ancient — though untitled — families. Their fortune on both sides is splendid. They are destined for each other by the voice of every member of their respective houses; and what is to divide them? ①The upstart pretensions of a young woman without family, connections, or fortune. Is this to be endured! But it must not, shall not be. If you were sensible of your own good, you would not wish to quit the sphere in which you have been brought up.”

“In marrying your nephew, I should not consider myself as quitting that sphere. ②He is a gentleman; I am a gentleman’s daughter; so far we are equal.”

“True. You are a gentleman’s daughter. ③But who was your mother? Who are your uncles and aunts? Do not imagine me ignorant of their condition.”

“Whatever my connections may be,” said Elizabeth, “④if your nephew does not object to them, they can be nothing to you.” (Ch. 56, 下線筆者)

Lady Catherine によれば、自分の娘と Mr. Darcy の結婚は昔から両家の了承事項となっていて、家柄や財産などの点において申し分がない、そこへ Elizabeth のような身分違いの者が割り込んで邪魔などするものではない、というのであった。ここでの Lady Catherine の下線部 ① や下線部 ③ の言葉が、先にも引用した Mr. Darcy が最初の求婚の際に Elizabeth に言った言葉 “Could you expect me to rejoice in the inferiority of your connections? — to congratulate myself on the hope of relations, whose condition in life is so decidedly beneath my own?” (Ch. 34) とすっかり重なっていることがわかる。この伯母と甥はその人間性は大きく違ってはいるものの、二人とも「結婚」をめぐるには「家柄」が最も大事であると考えている点で一致してい

るのだ。

この個所で興味深いのは、下線部②にあるように、Elizabeth が Lady Catherine に対して、Mr. Darcy も「ジェントルマン」であり、自分も「ジェントルマン」の娘である、だから釣り合いについては問題がないとする反論の仕方である。確かに、Mr. Darcy も自分の父親も同じ地主階級に属しているのだから対等であるという Elizabeth にも一理ある。しかしながら、同じ地主階級でも、かたや貴族と縁組できるような伝統と格式を持ち、桁外れな財産を所有する名家、かたや庶民の親戚がおり、なおかつ十分な持参金を娘に与えることもできない地方地主という点から見れば、それは世間一般の見方とも重なり、Lady Catherine の憤慨にも一理あるとも言える。ここで注目したいのは、下線部④の「本人がいいのなら、あなたには関係ない」という Elizabeth の言葉である。この言葉からこそ、主人公としての「新しさ」を彼女に読み取ることができる。

3. 啓蒙思想と Austen

Austen の小説を順番に読んでみると、物語の展開パターンやキャラクター造型などが共通していることがわかってくる。そのひとつに、彼女が描く教区司祭のほぼ全員が聖職者らしくないことがあげられる。*Northanger Abbey* の Henry Tilney はすっかり地主の息子にしか見えないし、*Pride and Prejudice* の Mr. Collins や *Emma* の Mr. Elton らはタイプは違えど、その俗物根性は相当なものであり、とても教区民のお手本になれるような存在ではない。これから教区司祭となる登場人物としては、*Sense and Sensibility* の Edward Ferrars や *Mansfield Park* の Edmund Bertram などがあるが、いずれも強い信仰心ゆえに聖職者を目指すのではなく、理由はそれぞれで違えど、職業として教区司祭を考えている。*Persuasion* には

Charles Hayter という教区司祭が登場するが、ある地方地主の娘の婚約者と紹介されるだけで、作品において十分に言及されることもない。作者本人が教区司祭の娘であり、兄たちもそれを引き継いだことを考えると、同じように兄弟がそうであった海軍将校が作品において絶賛されているのは大違いである。

この点について考えていくには、*Mansfield Park* という作品が大きなヒントになる。この作品は、他の作品と同じく、一見するだけでは、ヒロインの恋愛と結婚を主なテーマとするもののように思えるが、Austen は姉に宛てた手紙の中で、執筆していたこの作品について、“Now I will try to write of something else, & it shall be a complete change of subject — ordination.” (1813年1月19日付)と書いている。この作品の主題は、“ordination”，つまり「聖職位授与」だという。作者が、自分の作品について語る言葉をどのくらい信じていることができるかは慎重に考える必要はあるが、確かに、*Mansfield Park* には他の作品にはない、教区司祭の社会的役割について議論する場面が描かれている。

主としてその議論を担っているのは、ヒロインが密かに心を寄せる Edmund Bertram と、そんな彼が惹かれている Mary Crawford とである。彼は、自分を慕う従妹の気持ちには気づかず、才気煥発な Mary に思いを寄せているが、自由奔放にも見えるこの女性が教区司祭となる自分の妻としてふさわしいのかどうか自信が持てない。一方、Mary も Edmund を憎みながらも、教区司祭という地味な職業の夫を持つことには我慢できず、何とか彼の気持ちを変えさせようと努力している。そんな中、Edmund は教区司祭の役割の意義を次のように主張している。

“The nothing of conversation has its gradations, I hope, as well as

the never. A clergyman cannot be high in state or fashion. He must not head mobs, or set the ton in dress. But I cannot call that situation nothing which has the charge of all that is of the first importance to mankind, individually or collectively considered, temporally and eternally, which has the guardianship of religion and morals, and consequently of the manners which result from their influence. No one here can call the office nothing. If the man who holds it is so, it is by the neglect of his duty, by foregoing its just importance, and stepping out of his place to appear what he ought not to appear.” (Ch. 9, 下線筆者)

ここで興味深いのは下線部分である。Edmund は教区司祭の役割について、信仰ではなくむしろ「マナーズ」を守る者と説明している。そもそもイングランド国教会は信仰や教義についての議論で興ったのではなく、国王の離婚問題への対処が理由であったこともあり、プロテスタントの他の国々とは信仰に対するスタンスのとり方が異なっているとされている。それにしても、聖職者の社会的役割について、信仰上のものについてはほとんど具体的には触れず、社会の「マナーズ」の守護者と割り切っている点は、彼に限らず、この時代の人びとの考え方の特徴と言えるかもしれない。

この点について、Edmund は、次のようにさらに強調する（特に下線部分）。

“Not, I should hope, of the proportion of virtue to vice throughout the kingdom. We do not look in great cities for our best morality. It is not there that respectable people of any denomination can do most good ; and it certainly is not there that the influence of the clergy can be most felt. A fine preacher is followed and admired ; but it is not in fine preaching only that a good clergyman will be useful in his parish and his neighbourhood, where the parish and neighbourhood are of a size capable of knowing his private character, and observing his general conduct, which in London can rarely be the case. The clergy are lost there in the crowds of their parishioners. They are known to the largest part only as preachers. And with regard to their influencing public man-

ners, Miss Crawford must not misunderstand me, or suppose I mean to call them the arbiters of good-breeding, the regulators of refinement and courtesy, the masters of the ceremonies of life. The manners I speak of might rather be called conduct, perhaps, the result of good principles ; the effect, in short, of those doctrines which it is their duty to teach and recommend ; and it will, I believe, be everywhere found, that as the clergy are, or are not what they ought to be, so are the rest of the nation.” (Ch. 9, 下線筆者)

Austen が描く教区司祭に聖職者的な印象が希薄なことを考えていくと、彼女がいわゆるヨーロッパ啓蒙思想の時代に生きていたことに行き当たる。イマヌエル・カントは、『啓蒙とは何か』(1784)の中で「啓蒙」について次のように書いている。

啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜けでることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性をつかうことが出来ないということである。人間が未成年の状態にあるのは、理性がないからではなく、他人の指示を仰がないと、自分の理性を使う決意も勇気ももてないからなのだ。だから人間はみずからの責任において、未成年の状態にとどまっていることになる。こうして啓蒙の標語とでもいうものがあるとすれば、それは「知る勇気をもて (サペーレ・アウデ)」だ。すなわち「自分の理性を使う勇気をもて」ということだ。³

それでは、「知る勇気」を持ち、「自分の理性を使う勇気」を持つためにはどうすればよいのだろうか。ドゥニ・デイドロは『ブーガンヴィル航海記補遺』(1772)の中で次のように言う。

超自然的存在や神にもとづく制度は、時がたつにつれて市民的・国家的法律に変貌していき、そのためますます強固で永続的なものになってしまう。

3 イマヌエル・カント、『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編』木田元訳(光文社古典新訳文庫・2007年) p. 10.

ということ。他方、市民的・国家的制度のほうも、しだいに神聖化されていき、ついには超自然的存在や神に基礎づけられた掟にまで変質してしまう、ということです。⁴

デイドロのここでの批判の念頭に教会の存在があることは明白であろう。中世以来、ヨーロッパ社会では、キリスト教会に代表される伝統的で妄信的な権威容認や思想受容に基づき人びとが生活してきたが、理性の啓発によって人びとの生活の改善と進歩を図ろうとするという動きが「啓蒙」思想と連動して起こってきた。必要なことを「知る勇気」を持ち、物事の判断を行う「自分の理性を使う勇気」を合わせ、自分の頭で考えることの必要性が強く説かれたのである。

このような思想的な動きの中で、人びとは国家や教会を盲信するのではなく、理性的に宗教や信仰を捉えようと試み、それが宗教の世俗主義へとつながっていく。イングランド国教会における教区司祭の役割が、信仰上の指導者や教義の解釈者としてのものではなく、社会における道徳、つまり人びとの生活規範の守護者としての役割が強調されるようになったのもその影響からであろう。*Mansfield Park* の Edmund の議論などを踏まえて考えれば、Austen が描く教区司祭の聖職者らしくなさを通して、彼女もまたヨーロッパ啓蒙主義の影響を受けていると考えることができる。

4. Elizabeth の「新しいさ」

ヨーロッパ啓蒙主義の影響、つまりカントが言う「他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことが出来ない」状態から脱し、自分の価値観でもって生きることを試みるようになっていく過程は *Pride and Prejudice* の中に

4 ブーガンヴィル『世界周航記』（山本淳一訳）／デイドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』（中川久定訳）、「シリーズ・世界周航記2」（岩波書店・2007年）p. 161.

も見出すことができる。改めて、そのことについて「ジェントルマン」をキーワードに考えてみたい。

先にも触れたように、Lady Catherine にとっての「ジェントルマン」とは、家柄や階級で決まるものであり、最初の求婚での Elizabeth の拒絶を経験する前の Mr. Darcy もそれと似たようなものであった。しかも、彼は自分がこれまで「ジェントルマン」らしく振る舞い、そしてそのような自分が「ジェントルマン」であることに強い自負を持っていた。しかしながら、彼らが抱いている「ジェントルマン」像は、デイドロの言葉を借りれば、長い間、イギリスの社会の中で盲目的に信じられてきたことで、強固で永続的な「市民的・国家的制度」へと変貌したものに過ぎないものであった。だからこそ、Elizabeth が「もっとあなたがジェントルマンらしく振る舞ってくださっていたら」と指摘したことは、ずっと「ジェントルマン」として振る舞ってきたつもりで、そのことに疑いさえ抱いたことがなかった Mr. Darcy にとって、自分の求婚が拒絶されたことにとどまらない大きなショックを与えたのだろう。事実、信頼できる召使いである女中頭の Mrs. Reynolds は、Mr. Darcy がまだ幼い頃から接してきた経験を通して、彼のことを理想的な主人として手放しに絶賛している。

一方、Elizabeth は、そのような「市民的・国家的制度」に基づいた「ジェントルマン」像に拘束されることはない。彼女にとっての「ジェントルマン」とは、家柄や親戚関係だけに基づくものではなく、その人物の人間性により多くの根拠が置かれている。このことは、彼女が、世間に流布している常識や因習に囚われることなく、自分の頭で考えて判断することができる素養のあることを意味している。一方で、周囲からは疑いもなく完璧な「ジェントルマン」と考えられていた Mr. Darcy は、階級意識に囚われている限り、「未成年の状態」にとどまっていることになる。

このように考えていくと、Elizabeth が言う「ジェントルマンらしく振る舞う」ことは、世間一般に常識的とされることに縛られず、自分自身の価値観でもって、曇りなく判断できることを意味しているとわかってくる。例えば、恋愛などの人間関係においても、相手のことを家柄や階級という「市民的・国家的制度」に基づいてのみ考えるのではなく、個人の人間性に基づいて判断することが求められる。彼女にとっては、恋愛や結婚が、社会制度的なものではなく、より個人的なものとなっていることがわかる。Elizabeth の叔父夫妻と交流する機会を持った Mr. Darcy が、彼らをロンドンの一介の商人としてひとくくりで考えるのではなく、すぐれた人間性を有した個人として高く評価するようになったことは、彼が「市民的・国家的制度」を超えて判断をすることができるようになった証となるのであった。

以上のように考えていくと、Elizabeth が Mr. Darcy に向けた言葉 “had you behaved in a more gentlemanlike manner”，そして Lady Catherine に対する言葉 “if your nephew does not object to them, they can be nothing to you” は、小説のヒロインの個人的な感情を超えたものと響いてくる。*Pride and Prejudice* という作品の中に、当時のイギリスにおいて、「未成年の状態」の個人がヨーロッパ啓蒙主義の影響を受け、自らの判断と感覚に基づいて物事を判断できるようになってきた状況を読み取ることができる。そして、Austen は、「ジェントルマン」観が変容していくさまを通して、イギリスの社会が大きく変わっていく姿を描き出していると理解することができるのだ。

ソール・ベロー『雨の王ヘンダソン』の 主人公は何を考えているのか ——小説の創造的解釈をめざして

植松靖夫

粗筋

Eugene Henderson は 55 歳、裕福で社会的地位も高く、体格にも恵まれているが、精神的には充実感が欠如していて、それが “I want, I want, I want” という内なる叫び声となって現われる。その声が何を欲しているのかを探して、アフリカに行く。

アフリカに着くと、Henderson は現地のガイド、Romilayu を雇い、Arnewi 族の村へと案内される。そこで村の指導者たちと仲良くなる。Arnewi 族が飲料水にしていた池にカエルが棲みつき、「不浄 (unclean)」と見なされて水が飲めなくなる。Henderson はカエルを追い出して Arnewi 族を救おうとするが、結局、カエルだけでなく池までも吹き飛ばして、悲惨な結末となる。

Henderson は Romilayu と共に Wariri 族の村へとおもむき、そこでマンマー (Mummah) の木製の巨大な女神像を持ち上げることに成功して、期せずして Wariri 族の雨の王 Sungo となる。すぐに地元生まれで西洋で教育を受けた王様 Dahfu と友情を結び、哲学的な議論を展開する。

Henderson は先代の王だった Dahfu の父の生まれ変わりとされるライオ

ソール・ベロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

ンを探すことになるが、ライオン狩りは失敗し、王は致命傷を負う。Dahfu が死ぬ直前に Henderson は雨の王が王座を告ぐことになるのだとわかる。王になどなりたくないし、国に帰りたいたので、Henderson は Wariri 族の村を逃げ出す。

Henderson が本当に精神的な満足、魂の満足を覚えたのか、明確にはなっていないが、小説は楽観的で明るい調子で終わる。

1. 小説をどう読むか

- ・小説を読む際に何に留意したらいいか
- ・意味の鍵はどこにあるのか
- ・基本的な構成はどうなっているのか
- ・見かけの矛盾をどう解決するか



小説の構成と方法の理解

2. 小説のユニークな特徴



小説の世界と自分の体験との間を移動する

Saul Bellow の *Henderson the Rain King*

What made me take this trip to Africa? There is no quick explanation. Things got worse and worse and worse and pretty soon they were too complicated.

When I think of my condition at the age of fifty-five when I bought the ticket, all is grief. The facts begin to crowd me and soo I get a pressure in the

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

chest. A disorderly rush begins — my parents, my wives, my girls, my children, my farm, my animals, my habits, my money, my music lessons, my drunkenness, my prejudices, my brutality, my teeth, my face, my soul! I have to cry, “No, no, get abck, curse you, let me alone!” But how can they let me alone? They belong to me. They are mine. And they pile into me from all sides. It turns into chaos.

However, the world which I thought so mighty an oppressor has removed it wrath from me. But if I am to make sense to you people and explain why I went to Africa I must face up to the facts. I might as well start with the money. I am rich. From my old man I inherited three million dollars after taxes, but I thought myself a bum and had my reasons, the main reason being that I behaved like a bum. But privately when things got very bad I often looked into books to see whether I could find some helpful words, and one day I read, “The forgiveness of sins is perpetual and righteousness first is not required.” This impressed me so ddeply that I wsent around saying it to myself. But then I forgot which book it was. (3)

〔どうしてアフリカ旅行をすることになったのか。簡単に説明ができない。事情がどんどん悪くなっていて、手に負えないほど複雑になってしまった。〕

私が切符を買った 55 歳の頃を思い出してみると、なにもかもが愚痴の種になるようなことばかりだった。いろんなことがどっと私に押し寄せてきて、すぐに胸が押さえつけられるような感じがする。すべてがめちゃくちゃに——私の親、妻、女性の友人、子供、農場、動物、癖、金、音楽のレッスン、自分の酔態、偏見、自分の野蛮な行為、歯、顔、魂などが迫って来はじめる。私は思わず叫んでしまう。

「いやだ、いやだ。引っ込め、この野郎。ほっといてくれ！」しかし、ほっとしてくれるわけがない。なにしろ、それはすべて私のものなのだから。至る所から押しかけてきて、混乱状態になってしまうのだ。

ところが、強烈な迫害者だとばかり思っていた世の中が、その怒りを私に向けずにくれた。ただ、なぜアフリカに行ったかを説明しなければならぬとしたら、私は事実と向き合うしかない。まず、お金の話から始めた方がいいかもしれない。私は金に不自由はしていない。税抜きで 300 万ドルを父親から相続した。しかし、私は自分を浮浪者だと思ったし、それは無理もないことで、なにしろ自分で浮浪者のような恰好をしていたのだから。ところが、状況がひどく悪化してきたときに、何か助けになるも

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

のではないかと、密かに色々な本に目を通してみた。するとある日、つぎのような言葉にでくわした。

「罪の赦しは永遠のものであり、正しき行動が最初に要求されるのではない」

この言葉に感動したので、わたしはそれをつぶやきながら歩き回った。だが、そのうちに、それがどの本に出ていたかを忘れてしまった。」

文学の大きなメリットは私たち自身の体験とは無縁な人たちの生活の中に入っていけること。

Henderson との出会いを活用するには、何に注意すればいいのか。とりあえず作中人物を評価したら（今、Henderson に対して行なったように）、彼がどんな話題を選ぶかに注目しなければならない。

Henderson の場合は、金や年齢（55 歳）、人生の混乱状態についての認識、人生の意味の探求（「何か助けになるものはないかと、密かに色々な本に目を通してみた」）、聖書の語句の中に慰めを見出そうとする態度（「罪の赦しは永遠のものであり、正しき行動が最初に要求されるのではない」）などである。

これらは Henderson の個性や人生観の手がかりになるだけでなく、この小説の意味を解く鍵にもなる。

3. 分析的批評の秘訣

作品の異常な面とか印象的な面に特別な注意を向けなければならない。

⇒死のつながりについては短い描写がいくつも出てくるが、この時点では私たちが理解できることは何もない。



ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

異常な事柄，心を打つ場面などについて取ってきたメモが役に立つことになる

批評は同時に創造活動でもあり，基本原理を見出すために科学者のように，自分の経験や知識を自由に利用する必要もある。

大抵の優れた小説は多義性（ambiguity）をもっているものであり，言語と人間の行動は様々な解釈が可能なものなので，既に批評家たちが完全に小説を分析し終えていることはありえないし，ある小説がすべての面からすべて読みとられてしまったということもありえない。すぐれた小説は探れば探るほど，ますます大きな，解釈上の豊かさを生み出すものであり，優れた小説家は二次的で場違いに見える小さな事件・出来事を使って，作品の意味をふくらませようとしているものなのだ。

作者の意図ばかりにとられる必要はない。小説を読むということは創造的な解釈の仕事であり，そこに発見があるのだから。

資 料 編

- I. Granville Hicks. "The Search for Salvation," *The Critical Response to Saul Bellow*. Ed. Gerhard Bach. Westport, CT: Greenwood, 1995: 100-107. Print.

Henderson the Rain King は冒険小説で重要な意味を持っている。他の Bellow の作品同様，必死に自分を見出そう，自分を変えよう（transform）とする男の話であるが，Henderson の探求（quest）は，見知らぬロマン

ソール・ベロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

ティックな場所へと連れて行く。

Bellow はこれまでも奇怪な人物を登場させてきたが、Henderson は中でも突飛な行動に走る (extravagant) 人物だ。55 歳で、six-foot four inches (1 m 90 cm) の身長 of 巨漢で、金持ちで家柄も良いが、人生を無駄に過ごしてきたという。何かに突き動かされ、駆り立てられているのだが、何に駆り立てられ、どこへと駆り立てられているのか自分でも分からない。

どこかにいかなければと思って、偶々アフリカへ行く。信頼できるガイドだけ連れて、アーニューイ Arnewi 族という大人しい種族に会い、気に入るが、彼らの役に立とうとして、災難をもたらし、激しく後悔する。

この現代の Gulliver はさらにその後はワリリ Wariri 族を訪ね、その王 Dahfu と親しくなる。王は医学の勉強をしたことがあり、英語を話せる。Henderson は怪力を發揮して巨大な像を持ち上げたために、雨乞いの儀式で重要な役割を担うことになる。そして雨が降ったために、雨の王になる。

これだけでも変な話だが、さらに変なのは王の Dahfu が一種のライオン信仰へと、気乗りのしない Henderson を引きずりこもうとする。二人は人間の性質と運命について語り合う。そして、山場となるのは、ワリリ族の危険な儀式のしきたりに則って行なわれるライオン狩りで、たぶん策略により王は死に、Henderson は Dahfu の後継者にされないように逃走する。Henderson はライオンの子を連れて、自分の探し求めたいものを見つけたとの確信をもってアメリカに帰る。

自分の性質について誠実に思いを巡らし、しかしその性質を変えることができない人間の苦悩を Bellow ほど見事に表現した作家はいない。(101)

II. Donald W. Markos. "Life Against Death in *Henderson the Rain King*," *The Critical Response to Saul Bellow*. Ed. Gerhard Bach. Westport, CT:

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

Greenwood, 1995 : 107-119. Print.

Henderson という人物のなかに、再生への潜在的な活力だけでなく、疎外の破壊的な兆候も見られる。Bellow は Henderson を生身の人間以上に大きく見せ、全世代のアメリカ人の恐怖と希望の多くを体現させている。(108-09)

Henderson はアメリカ、つまり変化を必要としているアメリカの象徴のように論じられることも多い。(109)

最初の4章では Henderson のアメリカでの激動の生活を描き、アフリカ行きを思い立った心境を説明しようとしている。(109)

二度結婚したが、再婚した妻ともうまくいかず、子供たちの面倒もみない。借家人と喧嘩をして、ペットを撃ち殺そうとしたり、騎兵隊の兵士と口論になったり、自殺するぞと脅したり。自分の怒鳴った声がある老女の心臓麻痺を引き起こしたと確信していて、それがアフリカ行きを思い立った直接の理由だ。(109)

Henderson は激しい、方向の定まらないエネルギーに突き動かされて、他人とも自分とも衝突ばかりしているが、それでも解放 (release) を求めている。彼は自分の土地に立ちながら「草の下の大地には、死骸もいっぱい埋まって」いて、「死骸も腐葉土と化して、草の成長を助ける」(29: 訳43) と考えていた時のことを思いだす。草と花に囲まれていても Henderson が幸せではないのは、まだ自分自身が必要な transformation を実現できてないからだ。そして、彼は再生 (rebirth) にイメージに大いに興奮する。ある科学雑誌で40年か50年に一度開花する砂漠の花で、その種は人工的に水に浸けてもダメで、雨水の自然な状況の中で発芽するという記事を読んで強い感銘を受ける。種子には独自の有機的な成長力があり、人間

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

にも同様の力があるにちがいない。再生 (renewal) の衝動がこの小説の中心にある。

Henderson the Rain King では、価値のない宇宙で畏にかかっているもしくは漂流している人間という独善的なモダニストの人間観と、もう一つ有機的な宇宙の中で、成長の原理を共有して宇宙と一体化しているというロマンティックな人間観が展開されている。

Henderson が “I want. I want.” という声を聞くように、変化を求める力は内側から起こる。アフリカへの旅は失われた状況への回帰を目指すものであり、Conrad や Hemingway 以来の、人間が自分についての真実を発見する場所である。この小説の意味は、Arnewi 族と Wariri 族とその leaders の象徴的な理解にかかっている。(110)

※ Henderson が最初に出会う the Arnewi は大人しくて愛すべき種族で、従って「不運 (unlucky)」である。運命 (旱魃, 飲料水を汚すカエル) を受け入れ、自ら改善しようと積極的に行動することが出来ない。一方、Henderson は熱意と善意に溢れ、彼らのために行動しようとする。しかし、自らをわかっていないために、衝動的な行動により、役に立つよりも、破壊することになる。火薬と懐中電灯で作った爆弾はカエルを殺すだけでなく、貯水池をも破壊してしまう。現代人が科学技術に逆襲されていることを示している。

Wariri 族は攻撃的で、好戦的で、敵意があり、残酷。何かしら「死」と関わりのある種族で、村の外れにぶら下がっている死体、Henderson の小屋に置かれた死体、魔女らしい女の首など、攻撃の本能だけでなく死の本能も表わしている。様々な大きさの神の木像があり、「空気、山、火、植物、牛、幸福、病気、霊、誕生と死」(181; 訳 254) を支配する神々の像だった。要するに、それは生命の神々で、彼らがその木像を乱暴に扱うのは、life

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

に対する *resentment* の表われ。この憤りは *Arnewi* 族の受身の姿勢と対極をなしている。*grun-tu-molani* 即ち *love of life* をもっている *Henderson* はその光景に慄然とし、「神々に対して腹を立てる根拠は十分認めはするものの、これではあまりに安っぽい振る舞いとしか見えない」（訳 255）と思う。

しかし、*life* に対する *Wariri* 族の姿勢はのちに登場する儀式に表われる。その儀式では、女たちが狂ったように踊りながら短い鞭を振り回し、木製の神々の像に向かって行き、雨の王となった *Henderson* をもこの狂乱に巻き込んでいく。

Arnewi 族と *Wariri* 族が人間の相反する二つの本能を示しているとしたら、完全な人間というのは、この二つの傾向が調和していて、それが協働している人間だと考えられる。事実、*Dahfu* は *Henderson* に二つの種族はかつては一つの種族だったが「運の問題で二つに分かれた」（166：訳 233）と言われる。現在もこの種族は昔一緒だった痕跡を残しているが、それよりもさらに両種族の長、*Queen Willatale* と *King Dahfu* は人間の力（*human forces*）の完全な調和（*harmonization*）を体現していて、*Henderson* が達成しなければならないバランスのとれた状態（*equilibrium*）の見本となっている。（111）

Dahfu は、人間は *imagination* の力で自分を変えることが出来ると断言する。*Emerson* が人間の魂を大きな力と靈感の源である *the Oversoul* と結びつけて考えたように、*Dahfu* は人間の想像力を自然界における創造的な生命力を伝えるものと見なしている。想像力によって人間は現在の自分を超える、さらに優れた存在へと変化する力を得ることができるのである。

理想は *Dahfu* の言葉よりもその人本人によく表わされている。*Dahfu* の智慧は文明人にはよく見えなくなっている源から出てきているように見え

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

る。Henderson は、科学的関心を持ちながら原始的な迷信を信じているらしい Dahfu の姿に当惑するが、この組合せは Henderson の中では分裂している理性と本能の結合を意味している。

Dahfu は Henderson に死の恐怖を乗り越えさせようとし、Becoming の不安な状態から Being の静穏な状態へと導こうとする。「最も強力な食欲の持ち主は、また必ずや現実を最も疑う人なのです」(232: 訳 325) と Henderson に言う Dahfu の言うことは正しい。Dahfu 王は、Henderson は「すぐに避けるタイプ (avoider)」だから、ライオンは「避けられない」(260: 訳 365) のでライオンが彼を変えてくれるという。

Henderson に自分の性質を十分に理解させるため、Dahfu は宮殿の下のライオンの小屋で実験を行なうことにする。実験は Henderson をライオンの前に連れて行き、ライオンの真似をさせるのである。四つん這いになって吠えさせるのだ。

Henderson は Dahfu のいう、選ばれた「気高い自我」を目指して意識的に変身するという考え方を受け入れる。

「古い自我を克服しようとしているのだ。そうだ、そのためには、何か新しい基準を受け入れねばならぬ。強いてある役割を演ずることさえ、やらねばならぬ。身につくまでは、一時は、みずからを欺く必要さえあるかもしれない」(297-98: 訳 422-23)。ただし、Henderson の目指したい意識的変身の方向は、動物的ではなく人間的なものだった。

しかし、ライオンは Henderson に確かに影響を与える。ただしそれは Dahfu が小屋で飼っているペットのライオンではなく、王がつかまえなければならぬずっと大きくて獠猛なライオンだった。Henderson に変化が起こるのは、そのライオンが近づいて来るのを王と一緒に待っていた時だ。このライオンの唸り声が「意識の入り口を」叩き、Henderson はライオン

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

の「しわだらけの、引き締まった顔」(307: 訳 436)の中に“darkness of murder” (訳されていない)を見た。「この動物の唸り声は死の声だった」(307) ライオンの唸り声は Henderson が現実に対して抱いていたかもしれない幻想 (illusions) を貫き通した。「非現実だ、非現実だ、これが平穏とはいかないが永遠の生活に対するほくなり計画だった。しかし、これもライオンの一吠えによって、消し飛んでしまった」(307: 訳 436-7)

Dahfu と一緒に待ちながら Henderson は人間もその一部である自然界に属する死と野蛮の現実を理解する。

この出来事の結果は、Henderson にとっては覚醒させるほどのものであり、Dahfu にとっては死を意味する。

Dahfu は完璧に自然な人間の姿をしていて、自然に近い人間であらゆる葛藤から解放されている人間だったが、Henderson はそのような自然な完璧さと満足は自分には十分ではないとっていて、彼が必要とするのはもっと人間的な状態なのだ。

王の死後、Henderson には今まで求めていた「変化」が起こる。(「もう眠りは破られ、ほんとうの自分に立ち帰れた」328: 訳 467)そして、彼は「なぜあらゆる人間が、このために苦しまなければならないのか。本来の自分に帰ってことぐらい、むずかしいことはまたとないからね。ほくらは、その代わりに、いろんな傷を身に作っていく」(328: 訳 467)という。

小説の最後で Henderson は飛行機がニューファンドランドで給油している間、北極の雪の上で飛び跳ねることによって、新たな存在感を認識する。

この小説の要点はアフリカから戻らなければならないということだ。文明社会へと戻る必要がある。

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

III. Ellen Pifer. *Saul Bellow : Against the Grain*. Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press, 1990. Print.

Chapter 6 “Beyond History and Geography : *Henderson the Rain King*”

道化のような役回りをしながら、Henderson は自分の旅の哲学的な性質 (metaphysical nature) について匂わせる。「ぼくとしては、地理の本にのっていない土地に乗りこんだという考えを捨てきれなかった。いや、地理学なんかを気にかけてるわけじゃない。地理学なんてある土地の位置さえきめれば、それで万事おしまいといった、生意気な考え方にすぎんのだから」(55: 訳)

Henderson にとってアフリカの奥地に行くことは、「過去の中に——歴史とか何とかいうまがい物じゃない、ほんとうの過去の中にはいりこむ」(46; 訳 67) ことを意味していた。

※ Henderson が発見する「未知の世界 (*terra incognita*) は地図上には見つからない世界であり、その異国は従来の時間のカテゴリーを超えていて、空間の座標に留まらない。Henderson にとって歴史と地理の向こうにあるのはアフリカそのものではなく、死の世界から解放された、現実の世界、ある精神状態なのだ。(96)

小説の最初のページで語り手としての Henderson は過去の自分と現在の自分の比較している。「アフリカ行き切符を買った 55 歳の時の俺の状況は、何もかもが悩みのタネだった」と言い、すぐに「でもあんなに圧迫感があると思った世界が、もう俺に怒りをぶつけてくれることが無くなってしまった」と付け加える。(98)

アフリカ旅行を経て、Henderson がもう世界から圧迫されなくなったのは、「今の自分は、前に自分だと思っていた人間とはちがう」(I'm not

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

what I thought I was. 328) からだ。かつては Lily のように「人を変える愛情の力 (love's transforming power)」を信じるものを莫迦にしていた男が、まさにその力によって変えられるのである。

アフリカでは Arnewi 族と Wariri 族を相手に試練を経験するが、ライオンの Atti との試練が死という「生の現実 (raw fact)」と直接、接することになる。しかし、この経験は逆説的に、死の彼方にある現実へと目覚めさせてくれて、それは愛の絶対的な力により支えられている現実だった。(98)

魂の眠りをついに破る力となるのが、Lily だけでなく他人——自分の子供たち、Romilayu, Dahfu——へと、さらには地球そのもの、つまり一人一人の人間 (mortal) を死へと委ねるこの変わりやすい世界へと向けられる Henderson の見出された愛なのである。あらゆる現象に死の宣告を読みとっていた男が、不死 (immortality) の性質を理解する人間へと変貌する。Henderson の意識の変化を理解するためには、まず、アフリカへ行く以前の Henderson の話に目を向けなければならない。この出発点から「地理を超えた」彼の旅の距離が正確に理解できる。

旅に出る前の Henderson には「とらわれの身」を示す怒りと敵意が見られる。彼の反社会的な爆発と衝動的な残忍な行為は「mortality」自体への憤激から生じている。彼は死に取り憑かれていて、人生における意味も価値も目的も否定するような人生観の持ち主で、偶像崇拜者の常で、自分のもっとも恐れているもの——死——を崇拜するようになる。King Dahfu がのちに Henderson に言ったように、「したくないことのために自殺というのは、いちばん多い原因ですね」(233; 訳 328)

Henderson は第2次世界大戦が終わると軍隊をやめて、豚の飼育に精を

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

出す。この仕事の象徴的な意味について、語り手 Henderson はこういう。“When I came back from the war it was with the thought of becoming a pig farmer, which maybe illustrates what I thought of life in general.”「戦争からもどってきたときは、豚の飼育をやりだすつもりで、これが、当時のぼくの人生観を物語っているかもしれない」(20; 訳 29) ずっとのちに彼はこう認めている。“The hogs were my defiance. I was telling the world that it was a pig.”「豚を飼ったのは、ぼくなりの反抗だ。世界に向かって、お前こそ豚じゃないかと言おうとしたのだ」(287-88; 訳 407)

しかし、この内的な変貌が起こる前に、Henderson の精神は自身の肉体と世界の肉体に対して怒り続ける。そして怒りを露わにするたびに、怒りを解放するのではなく、さらなる怒りを募らせる。“Wrath increased with wrath.”「怒りは一層の怒りをよぶばかり」(23; 訳 35)

裕福で体力もあり体格も良い Henderson は物質的な世界では何不自由ない地位に君臨していられたが、それがしかし延々と続く苦悩 (torment) の原因ともなった。

コネチカットの農場で“the sun is shining on the pines and the air has a spice of cold and stings your lungs with pleasure.”「松の木に日が照り、空気にひんやりした味わいがある、喜びが胸にしみわたる」(28; 訳 43) が、“Beneath this grass the earth may be filled with carcasses . . . they have become humus and the grass is thriving.”「草の下の大地には、死骸もいっぱい埋まっていて、死骸も腐植土と化して草の成長を助ける」(28-29; 訳 43) ことを知っている。

アフリカで平和な Arnewi 族の中に入ると、女王の Willatale が「人生の智慧 (wisdom of life)」に根ざしたまったく別の救い (salvation) の方法を教えてくれるのではないかと感じる。“I thought that she could open her

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

hand and show me the germ, the true cipher.”「彼女が手を開くと、謎解きの鍵が、万物の芽がぱっと現われ出る、そうぼくは考えた」(100；訳 141)

しかし、Henderson はこの部族の水源地にいるカエルたちを追い払おうとして、自ら救済のチャンスを潰してしまう。

Henderson がカエルを吹き飛ばそうとしたのは、智慧を授けてくれた女王 Willatale への感謝の気持ちもあったことは確かだ。

女王は“Grun-tu-molani. Man want to live.”「グラン・チュ・モラニ、人間は生きたいということだ」(85；訳 120) と教えるが、Henderson の理解は浅く、“God will reward her, tell her, for saying it to me. I’ll reward her myself. I’ll annihilate and blast those frogs clear out of that cistern, sky-high.”「こんないい言葉を教えてくださって、神も認め、報い給わんことを。いや、女王には、ぼく自身の手でお報いしたい。あの井戸の蛙は、一匹残らず空中に吹っ飛ばして皆殺しにしてくれるぞ」(85)

この惨劇が起こる前、Henderson の「感謝の行為 (act of gratitude)」の裏にある曖昧な動機が既に示唆されている。カエルを吹き飛ばす爆弾を作りながら、Henderson は自分の「力」にうきうきしている。“I lay grinning at the surprise those frogs had coming, and also somewhat at myself, because . . . I went so far as to imagine that the queen would elevate me to a position equal to her own.”

「蛙の奴ら、びっくりしやがるぞと、思わずぼくそ笑んで、かなり得意な気持ちになった。(中略) 女王はきっとぼくを女王なみの地位に引き上げようとするだろうなどとまで思った。94；訳 134」Henderson は“all the know-how I had”「習い覚えたコツと技術」(102) をすべて利用しようし、技術を「悟り (enlightenment)」と思い違える。蛙を追い払って水不足の問題を解決しようとするのだが、そこには技術による解決への見当外れな

信頼が見られ、Henderson は「救い (salvation)」とは何なのかについて根本的に誤解しているのだ。無意識のうちに死を信仰していて、Henderson は“murder technique” (66: 殺人の手) によって「救い」を実現させようとする。過去を振り返りながら、Henderson はこの時矛盾する衝動に駆られていることに気づき、読者に向かってこう心の内を明かす。““Poor little bastards’ was what I said [about the frogs], but in actual fact I was gloating. . . . My heart was already fattening in anticipation of their death. We hate death, we fear death, but when you get right down to cases, there’s nothing like it. . . . I hungered to let fall the ultimate violence on these creatures in the cistern.” 「哀れなこいつらめ」と言い出したものの、実は内心ほくそ笑んでいたのだ。(中略) 彼らの死を期待して、ほくの心は舌なめずりを始めていた。ほくらは一応死を憎み、死を恐れてはいる。しかし、いざ底まで突きつめてみると、そんなもんじゃない。(中略) 池の中の生き物に、死の暴力を加えんという渴望に身を燃やしている」(89; 訳 125-26)

Arnewi 族に悲劇をもたらして初めて、Henderson は自分の「危険な know-how」と西洋の技術——オーストリア製のライター、H & H マグナム・ライフル、それに自身が被っているヘルメット——が、Arnewi 族の生活様式を支配している複雑な関係を歪める力を彼に与えることになるのではないかと考える。しかし、こんなふうには思いをめぐらすのは長続きしない。ひとしきり恥ずかしさと罪悪感を味わっても、すぐに自分の失敗を現代の know-how を実践する者は誰でも経験する失敗であると理屈をつける。“Is there a surgeon anywhere who doesn’t lose a patient once in a while?” 「外科医なら時々患者を死なせんわけにはいかないじゃないか」(115; 訳 161)。後に、交戦的で手ごわい Wariri 族の中に入ると、Henderson は様々な文明の利器によって彼らに印象づけようとする。攻撃的な Wariri 族は、

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

独自の（銃も含めて）「危険な know-how」を多数持っているために、Henderson が見せるライター、拡大鏡などを無視する。しかし、Henderson は西洋の進んだ know-how がもたらす安心感（security）を執拗に過大評価する。たとえば、Wariri 族は領土内では他国人の武器の携行を許さない（132；訳 185）と言われ、武器などを取り上げられると、「ああいう高級な設備をあいつらはよく知らない」（132）のではないかと思ったりする。

Henderson の衝動的な行動は、ambition と pride と longing for salvation が混じり合って生まれている（102）。いかにも Henderson らしい性急さで、Wariri 族の女神像マンマーを持ち上げる決心をした時、彼の野心と Arnewi 族の中での彼の運命的な行動の関係が明確になる。“I burned to go out there and do it. Craving to show what was in me, burning like that bush I had set afire with my Austrian lighter for the Arnewi children.”「〔ぼくにはきつとやれると思うと、うちなる野心があふれ、〕燃え上がり、出て行って、やりたくてならなくなった。目に物を見せてやるのだと、オーストリア製のライターで、アーニューイ族の子供の前で、火をつけて見せた藪みたいに、ぼくの野心は燃えだした」（185；訳 260）技術と精神的な解放（spiritual salvation）を混同しているところから、彼には悟り（enlightenment）が必要であることが滑稽にも際立ってくる。

マンマー像を持ち上げるのに成功すると、Henderson は Wariri 族の the Sungo つまり Rain King になる。あとでわかることだが、毎年、その像を持ち上げるのが Rain King の義務であり、失敗すると殺されるのである。

※ Henderson が勇気と優れた伎倆を見せつけ続けるうちに、またしても「死滅という厳然たる事実（raw-fact of extinction）」と向き合うことになるのは偶然ではない。人間の考え出した技術や方法が、人間を支配する

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

「死という厳然たる事実」に逆らい、超越することは考えられないことだ。Henderson が *salvation* —— 死に支配された存在から解放されること —— を達成するためには、現実に対する味方を根本から変えなければならない。

Wariri 族の中に入って、Henderson は世界が “an organism, a mental thing, amid whose cells I had been wandering.” 「別個の有機体、心をそなえた生き物で、その細胞の間をこちらがうろついてきた」(156; 訳 217) ことに気づく。そういう認識を Henderson は “peculiarity of my mental condition” 「ぼくの心的状態の奇妙さ」(157) のせいにする。しかし、自分の認識する世界が *mental construct* なのだから、自分が支配し命令を出せると考えているのは間違いだ。“From mind the impetus came and through mind my course was set, and therefore nothing on earth could really surprise me.” 「心からの衝動が生じ、心を通して、ぼくの行く道が定められる、そこで、心(しん)からぼくを驚かすものは、この世に何ひとつない」(157)

ところがその直後、彼が入り込んだ「未知の世界 *terra incognita*」はその思い上がりを打ち砕くことになる。Wariri 族の儀式が行なわれている時に King Dahfu の隣に坐った Henderson は司祭の緑色の古いナイフによってある男の胸が切りつけられ突き刺されていくのを見て、「心の底を、まるでトンネルでもくぐるように、強い衝撃が突き抜ける —— 下を通る汽車から、大きな建物に地響きして伝わってゆくような衝撃」(172) を覚える。こうして Henderson の認識が変化させられていく。

Henderson の「気づき (discovery)」は、あの蛙を攻撃して敗北感を味わった Arnewi 族との接触から始まっている。そして、Wariri 族との体験により、知識や技術 (knowledge and expertise) への過信が打ち碎かれる。たとえば、Wariri 族が雨乞いの踊りの準備をしていると、Henderson は Dahfu と「雨は降らない」ほうに賭ける。Dahfu 王に向かって太陽が照っているし、空

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

には雲一つ無いと言い放つ。王はその事実は認識した上で、reality とは神秘的で予想を覆すものだと Henderson に応え、見かけに騙されやすいのでは無いかとやんわりとたしなめる。

結局、Henderson の予想は裏切られ、儀式が終わる時に空は雲に覆われ雨が降り出す。しかし、既にその前に Henderson の科学を信奉する姿勢は皮肉にも自らの性急な行動によって否定されてしまう。つまり、儀式が始まると、Henderson は一か八か Mummah 像を持ち上げてみようと思ひ、待ちきれなくなる。Wariri 族によると、雨を降らせるにはこの女神像を持ち上げるといふ難題をクリアしなければならないのだという。自分の腕力を見せたくて仕方がない Henderson は初め莫迦にしていた儀式に自ら参加することになるのだ。

いよいよ女神像を持ち上げようと力を入れると、これまでの認識が大きく崩れてゆく。どうしても持ち上げたいと必死になると、突然、像は単なる物体ではなく、生きた老女となり、「生き物であり、偶像などではない。ぼくらは、互いに挑戦し、挑戦される立場だが、しかも親しいもの同士だ」(192)

こうして Henderson は見事に女神像を持ち上げる。この儀式に参加して、彼は未知の次元に入り込む。彼の勝利は「技術 (technique)」によるのではなく、二者間の相互関係 (interrelationship) がもたらしたもの。

※いわば Dahfu 王に導かれて、Henderson は精神的に目覚め、世界は敵対するものではなく、親密なものであり、生きているものだと認識するようになる。

ライオンの Atti がいる檻の中に入るように Dahfu は Henderson に促す。「ライオンを吸収する (absorbing lion into himself)」ことによって、恐怖に駆られることがなくなるのだと Dahfu が言う。※恐怖がなくなると、「そ

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

の代わりに美が姿を現わす。完璧な愛についても同じことが言えますね」(262) Henderson が恐怖と立ち向かうのは、Dahfu を好きで尊敬しているからであり、だから Dahfu の友情を失いたくなくて、ライオンの檻の中にも入っていくのである。この避けられない状況に対峙して、彼は徐々にライオンとの関係を構築する。ライオンとの試練を通して Henderson は精神的な解放を獲得する。雨乞いの儀式の時も、女神像への認識が変化して、「生きた女性」として持ち上げることができたのも、Henderson の愛情の力のお蔭だ。このように Henderson が精神的に目覚めるためには愛情が鍵となっている。

世界が敵ではなく親密な存在であることこそ Henderson が探し当てた真理であり、死の宇宙の束縛からの解放をもたらしてくれる。小説の最後のほうで、Henderson は “the universe itself being put into us, it calls out for sope. The eternal is bounded onto us.” 「ぼくらの中には、宇宙そのものが秘められているのだから、当然、広い舞台を求めるのだ。永遠なるものを内に預かっているんだ」(318)

死滅を恐れる気持もなくなるのは、自分が永続する全体の一部であるとの体験をしたためであり、この永続する宇宙と自分は愛によってつながっていることに Henderson は気づく。この世界に繋いでいる (binds) ものが、同時に彼を解放してくる。恐怖や死に束縛されないように解放してくれる。

E スコット・フィッツジェラルド 『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公 —— 傷からのつながり

井 出 達 郎

は じ め に

E スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』は、主人公が誰なのかをめぐる議論が今なお続いている作品である。タイトルにもなっているジェイ・ギャツビーが主人公なのか、それともギャツビーについての物語を一人称で語るニック・キャラウェイが主人公なのか、これまで様々な解釈がなされてきた。しかしこの主人公をめぐる議論は、その問題設定それ自体にひとつの問題を孕んでいる。タイトルを「ギャツビー」としつつその物語を別の人物が語るという構造は、確かに主人公をめぐる議論を引き起こすものになっている。だがそれならなおさら、なぜ作者のフィッツジェラルドはあえてそうした構造を採用したのか。従来の議論は、「どちらが主人公なのか」という問題に関心を向けすぎるあまり、そもそもなぜフィッツジェラルドは主人公が曖昧になる書き方をしたのかという問題をなおざりにしてきた。

本講義は、『グレート・ギャツビー』において主人公が曖昧なのは、ギャツビーとニックの間にある「ケア」と呼ぶべきつながりを描くために必然的に要請される書き方であった、という解釈を提示する。二人のケアというつながりは、「傷つきやすさ (vulnerability)」という性格からはじまり、「身

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公「代わり」という中心的なモチーフと絡み合うことで、自己と他者との境界を攪乱させる出来事を現出させる。そしてその傷からのつながりは、この作品をめぐってしばしば指摘される、アメリカのセルフメイド・マンという考えの問い直しとなっている。

1. ケアという問い——「傷つきやすさ (vulnerability)」をめぐって

作品におけるケアという主題は、語り手ニックによって提示される。ニックは、語り手の対象であるギャツビーに対する自分の立ち位置を、「気がつけばただ一人ギャツビーの側にいた」(172) といっって特権化する一方で、ギャツビーの死の原因となりながら立ち去ったようにしか思えないトムとデイジーを「彼らは不注意な人々 (careless people)」という言い方で非難する。ここで言外に明らかなのは、デイジーやトムを三人称の「彼ら」と呼ぶことで自分との違いを強調しながら、ニックは自ら特権化した自身の立ち位置を「ケアをする人」と位置づけていることである。事実、時には自分とのあまりの違いに圧倒され、時にはその行き過ぎた行動をたしなめながら、最後までギャツビーに特別な「関心」をよせ、「世話」をし、「気遣い」をみせつづけるニックの性格は、“care-away (離れつつも、ケアをする)” という音として、“Carraway” という名からも聴きとることができる。

ニックのギャツビーに対する「ケア」は、ニックがギャツビーに見出す「傷つきやすさ (vulnerability)」からはじまる。冒頭ニックは、「私がまだ若く、もっと傷つきやすかったころ父は僕にある助言をしてくれた。それ以来私は、その助言を何度も心の中で思い返している (In my younger and more vulnerable years my father gave me some advice that I've been turning over in my mind ever since)」(1) と述べながら、あたかも自分が「傷つき

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公

やすさ」を克服したかのような宣言で物語を始める。この宣言で言われる「傷つきやすさ」は、その後の物語で現れるゴシップに対する明確な弁明というモチーフを通して、自分で自分自身の批判にたいして「ケア」をできるという状態として提示されていると解釈できる。その状態は、ニックのフロンティア精神の表明とも関連しつつ、自分で自分自身をケアできるという自己完結的なセルフメイド・マンの在り方とも結びつけられていく。

他方ギャツビーは、自身のゴシップに対して明確な弁明ができないという点、人からの批判の対象に容易になる点において、ニックの示す、セルフメイド・マンのためには克服すべきはずの傷つきやすさを曝し続けていく。だが、まさにその傷つきやすさから、ニックのギャツビーへのケアは始まる。周囲の人々と同じくギャツビーにうさん臭さを感じていたニックは、ギャツビーが自身の出自についての告白をするとき、あからさまな嘘を含んだギャツビーの拙さゆえに、かえって彼に対する独特な関心を寄せ始める。自分で自分自身のケアをすることができないというセルフメイド・マンとは反対のあり方にこそ、ニックはギャツビーに惹かれていく。

2. 「開かれ」としての「傷」

ニックのギャツビーに対するケアのはじまり方は、傷つきやすさが自己完結的なセルフメイド・マンのあり方を切り開き、他者に対する「開かれ」という出来事を誘発することを示している。「傷つきやすさ(vulnerability)」について論じているエリン・C・ギルマンは、オックスフォード英語辞典の定義に使われている“open”という表現を用いながら、傷つきやすさが自分の意のままにならない仕方で影響を受け、また影響を及ぼすという状態に「開かれ」ていることを論じている。一方では自分で自分自身をケアできるセルフメイド・マンとしてふるまうニックは、他方では傷つきやす

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公さを通して、まさにこの意味においてギャツビーに対して「開かれ」ている。この傷の「開かれ」は、「ニック」という名前がもつ「切り傷 (nick)」という意味と強く共鳴している。ジル・ドゥルーズは、晩年のフィッツジェラルドのエッセイ「崩壊 (Crack-up)」についての論考の中で、タイトルになっている「裂け目」というモチーフが、「外と内に到来する者と、衝突・交差の複雑な関係、リズムの異なる二つの間歇的合流の複雑な関係」(ドゥーズ 269)を持つものであると述べている。この外と内の特異な関係は、ニックの「うちでもあり、外でもあった (within and without)」というセリフとともに、自己と他者の境界が曖昧になる「切り傷」としてのニック自身に正確に当てはまる。

3. ケアという主人公を曖昧にするつながり — 身代わりのモチーフ再考

傷とは裂け目であり、その傷からはじまるケアが自己と他者の境界を曖昧にしていくことは、何よりも物語の核となる「身代わり」のモチーフとして反復されている。まずギャツビーはデイジーが引き起こした死亡事故の「身代わり」として殺されることになるのだが、ギャツビーが犯人として殺された後、すなわち、文字通り周りからの批判に対して全くの無力になった後、ニックはギャツビーに対する噂話や憶測に対し、自分だけが答える責任があるという思いを持ち始める。そもそもギャツビーの物語全体がすべて終わった時点からはじまっていることを考えれば、弁明することができない存在に対するこの責任感は、ギャツビーについての語り全体に及んでいるといってよい。その意味で、表向きは一人称で語られるこの物語は、それが丸ごと身代わりの物語になっている。

一人称によって他者を語るというこの構造は、ケアという主題、自己と他者との境界が曖昧になるという主題とそのまま重なり合っている。それ

F.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公が最も端的にみられるのは、作中に現れる一人称と三人称が混ざった語りである。野間正二は、ギャツビーが自動車事故の後にデイジーからの電話を待っている場面をニックが想像する箇所において、ニックの語りが「僕は思うのだが」という一人称を用いた断りではじまりながら、それが「ちがいない」という断定に近いかたちに変化し、最後には一人称の視点では知りえないことまでも描写していく、という特異な語りのあり方を指摘している。この語りの特異性は、一人称と三人称の境界が極めて曖昧になっているという意味において、「傷」という意味を名前に含む持つニックが体現する、傷からのつながりのあり方そのものの実践となっている。

お わ り に

このように作品は、「ギャツビーとニックのどちらが主人公なのか」という問いではなく、「なぜ主人公がどちらかが曖昧なのか」という問いから読むことによって、ケアと呼ぶべきつながりという主題を現出させる。そのとき、主人公が曖昧であると言われてきた物語は、セルフメイド・マンになるためには克服しなければならない傷つきやすさ（vulnerability）からはじまり、身代わりというモチーフに結実する、自己と他者の境界がどこまでも揺らいでいくケアの物語として読み直すことができる。

※本講義は『東北アメリカ文学研究』第40号収録の拙論「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ——F.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』における傷からのつながり」を、連続講義「主人公から読む英米文学」のテーマに合わせて修正したものである。

引用文献

- Fitzgerald, Scott. *The Great Gatsby*. 1925. New York : Scribner. 1995.
- Gilson, Erinn C. *The Ethics of Vulnerability : A Feminist Analysis of Social Life and Practice*. New York : Routledge, 2014.
- ジル・ドゥルーズ 『意味の論理学（上）』1969年，小泉義之訳，河出書房新社，2007年。
- 野間正二 『グレート・ギャツビーの読み方』創元社，2008年。

東北学院大学論集（英語英文学）第 101 号目次
(2017 年 3 月)

論文

1. 等質物語世界的語りのタイポロジー (2)
等質物語世界的小説のナラトロジーのために
..... 遠藤 健一 (1)

平成 28 (2016) 年度文学部英文学科公開講義
「大学で学ぶ英語」

1. 英文理解の心理プロセス
..... 中西 弘 (81)
2. Varieties of English : teaching Englishes, not English
..... Phillip Backley (87)
3. 日本語母語話者が学ぶ英語音声のしくみ
..... 高橋 豊美 (97)
4. 異文化能力としての英語力の育て方
..... 村野井 仁 (109)
5. 翻訳学への招待
..... 古川 弘子 (121)

東北学院大学学術研究会

会 長 松本 宣郎

評 議 員 長 佐々木くみ
編 集 委 員 長

評 議 員

文学部	中西 弘 (庶務)	法 学 部	佐々木くみ (評議員長・編集委員長)
	佐藤 司郎 (編集)		白井 培嗣 (編集)
	加藤 幸治 (編集)	教養学部	仙田 幸子 (編集)
経済学部	白鳥 圭志 (編集)		下館 和巳 (編集)
	舟島 義人 (会計)		松本 章代 (編集)
	小宮 友根 (編集)		柳井 雅也 (庶務)
経営学部	小池 和彰 (会計)		
	村山 貴俊 (編集)		

東北学院大学論集 — 英語英文学 — 第 102 号

2018 年 3 月 12 日 印 刷

(非売品)

2018 年 3 月 15 日 発 行

編集兼発行人 佐々木くみ
印刷者 笹 氣 義 幸
印刷所 笹氣出版印刷株式会社
発行所 東北学院大学学術研究会
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
(東北学院大学内)

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY REVIEW

Essays and Studies in English Language and Literature

No. 102

March, 2018

CONTENTS

Article

1. *Gulling Sonnets* (1594) of Sir John Davies.....Osamu YAGAWA (1)
2. Action research to promote university students' academic literacy
by using online news Fumiko YOSHIMURA (33)

Proceedings of the Open Lectures 2017

1. On The Two Central Characters in G. Chaucer's *Troilus and Criseyde*
..... Yoshitaka SHIBATA (49)
2. Who is the protagonist ? : Reading *Othello* Wataru FUKUSHI (67)
3. Elizabeth Bennet as "New" Heroine : How Did the Enlightenment
Affect Jane Austen's Writing ? Hidetada MUKAI (79)
4. Ambivalent Heroes in Bellow's *Henderson the Rain King*
..... Yasuo UEMATSU (93)
5. The Bond of Nick : Care and the Question of Protagonist in F. Scott
Fitzgerald's *The Great Gatsby* Tatsuro IDE (113)

The Research Association
Tohoku Gakuin University,
Sendai, Japan